源氏図案

中　よもう　やまて

目安也

源氏目案巻第三

よ

一 よろづのことにも 其門の其道ハ何道も末代まで記と云也

一 よりどころなく 河寄様

一 よせともなく 縁者 餘情ニ説也

一 ようせずハ 不能 不善 あしくせずと云心也

一 よろしきことにだに さもあるまじきこと也よろしきを其宜ハ大なる事をさして云ゆゑに家ハ一家也

一 よもぎふ 蓬のしげりたる所を云也

一 よこさ雨あるやうにて 横死とて人のそれにあたりて死ぬると云也

一 よるのおとゞ 夜殿也 清涼殿

まわり四方素戸を南ハ大妻戸一間あり

一世人よれへこの文字を加へてよむべし後宇多院の御諱世仁(ヨヒト)さらしせいは世あるなや

一よゝへきこしいべき夜つぎは

更衣よ洲あへるこれ心や又夜つぎと深き洲るとや安說

一よをすゝ便(たより)や縁(えん)へんの夜は

一よさひよき思ひや

一よれつれの山のうゞきまひ

もいへり

一よろすゝ よろんあらとよむや

是いさらんべき女の心をさそのなべきやうれ乞へとゆへるや

一よさぬ不遇(ヨギヌ)や

一世をらひ志てぬやうに人よも

媿といふ心

一世のうちいまで継母(ケイボ)継子(ケイシ)の

あらぬ人のやうにとや

一夕分(ヨウヅ)ゝはひ ゆかこゝうさ海や

あひるあれいとや

一ようてこそ女の心のそれゆきそ凡

一よみぐへり蘓生(ヨミガヘル)又活(ヨミガヘル)

四十五

御とりかへしてかへさへと云やちがへさへられずや

一あさひのかげもまけずく　源氏十六才の息所女三才

一よづめ　打流(うち)るの心や　一よべきのふの夜のくずやらんへ

とかくおもひてよむや　一よざさうき(わかしとおれ)　過(すぎし)色おりしかす心

一られつらきされ物語　出家(シユツケ)あれば無常(むじやう)をさへ此のかや

一よげいかう世あれかう心や　一(哥)世のかよ　さめめ夢(ゆめ)とは　ぬる時(とき)

の夢まつおもはずうるかき世代いかべし

一(哥)よう波の　玉もれゆるしやうに源の心氏そてよみた

一(哥まみちの)みちんへ川　あすかし代わ家はよみへつや

一(哥恋のへん)世はめぐめ　世に世に分別(キフンベツ)や　一世の中(おなひ)くやしうる　桐壺帝(キリツボノミカド)の位(クニ)(ナガ)

と集在(シユシヤク)へゆづりあかすや　一世のかげと　世のるすれかや恐

の字と万葉に用
恵心僧都号横川僧都
源氏左遷の事成べし。悪后などの八宮の事をまうしめ
事也。宇治の巻にしるす
ろ衣なれバ。法師にいふとも也
衛門佐なるべし。月こハ。前のゆげいの尉人の事也。廷尉佐
別當の下也。ことをいふなり

一よ河の僧都 中宮のれうじや。
一ようしれへとぞとぞくめれバ
一うち波に此酒まて用ゐし
一ようしさうしもおもひすけまで
一よろひかゝん玉の 史記曰
尚有徑寸之珠。照車前後各十二乘。楚王臣隋侯蛇病愈て
ましに七寸の玉を含て夜まて恩を報じける。隋侯此玉
を得て楚王に献ず。夜中に常に有光明。故名夜光玉
一世に沈まし 漁父云 明石入道。瑞夢をひとつへり

一 おうしぬるみく枕草子にまず衾じ記すにて老女のけしやうせるこ
一 よしあきれ弘よく手良房の扣よくの例にて所絵馬を引
る。後代よ至るまで例ありて変ず。河海抄。良房公乃時の
事い所見なしといへ共もやましふすてとくべし
一 宮まち絵よりて言ふ所々の物語に。紀伊国なるの郡に。神
なりひのられ松といふ長者。堺上の演のうくわにて宮西八町の内に紫
檀蘇芳青くろくひ。めつらしき木どもを沢山ありて。金銀瑠
璃。車渠馬瑙の。調度を飾りなさって。東の陣のさいは春の山。南乃
陣のとまい夏のけ。西の陣のとまい秋の林。北まい松の林四面を
絶くかうへてると云る。此事を模すれ
一 世の古ひの後のとそれさ 後の文と又ときうしく云するあるを

一みゆきさ弄のどかなる心也　一まくらしひとも玉ぐし従三
位し給ふ　一あそちよなるなすべければ治賀
執政人四十ノ賀例古堀河のおほいおうちぎみ四十ノ賀九条の家
までする業平桜花の哥を詠　一あれつれの　実蓮院の紅葉賀
をとめしは何也なみつあるしずさと院をあずさる給也
一世をわれ世をみれども浮世のぐさいのる也おわず
所とハ野老をうちわれるや是ざ蓮の所ぬ君ある人との心也
一うちわらしすこく夢を信ずるハ小児女子ながこのむすさ云ん
丸孫々人云夜夢不須説けし心よや
一よるの性のあびしをよおそてあがしあけて　女三のもまえんあさ
不性嫩の事也悪鬼とそれのまへ三尺ぢちあく造りとく

目中四

又八文の用をはずしのかはりを四方によろかやぶれをされわ
がらや

一 奇幻 ほたる 蓮荷水暗蛍紅

夜 朗詠 雲は夜とちる深には無分別にや深の事はひろも不消とや

一 奇行門 よそてては槁木葉枝ちくしてもさかあげるまでや

一 奇 世は八代といふ八重かる雲なんぞ八文の世をいふ心はすとの心也

冷泉は心はかくれどもえそ絵をぬら心也

一 あけまの紀 よのまれ山の積と書を云や 毎月に此詞ある也

一 世をまたずる大君と書云れ中の璞無実なすといふ

一 やきりま よ紀のつら稚賭俗にいけすること也 賭ろ持也

一 奇 よろへてそ数かぬと大君に比して大君によりて中代君と

らんされ心也 一 よ紀うち中に方士文章

一求四虚上下東極絶天海跨蓬壺見最高仙山上多楼閣西廂下有洞戸東嚮闔其門署曰玉妃太真院 長恨哥傳

一まぼろしもがな まぼろしもがなは尋ゆく心成べし

た

一玉のをのこゆゑ 玉はほめたる詞也 玉の緒とはいのちの事

一たゆげ なやましき心也 一たゞよはし 弱き也

一たへがたし 難堪 一たく人 遠ちく人と同

一尋ゆく まぼろしは方士也 幻術士が名也 玉のありかを尋しもの

更衣の亀の方をいふへし 一太液の芙蓉未央柳 見長恨哥ニ

大液は池の名也 芙蓉は蓮の花也 未央は宮の名也 蓮花柳は楊貴妃

とくらべる 一大床子の御もの 禁中ニ大床子ト云

どてゝも机を二つそへて御膳をあぐるや。是ハ常にまいる供御や。おそくハ御膳ぞや

一たいくもつさ　退く敎

一たゝよハさし　不漂

一たゝ人くびふとうまじや　摂政関白とも。帝のおんうへまうしても。ぞく

人どの様や。親王の分限よりハ内まり様じや

一たつさ　便

一たしめべさ　様や。よくめうハ膳や

一大すらして　以脇人の家どうじとみえたるひとへより

一立田姫ごいちんまも　女の物ちごにまゝ深おしころふ。

まへていふや

一七夕のまゝも　ころぬひふる

もとまちられとや

一たのゝろ　札や

一たちられ　方便

一たらしへあふくまんへあくや

一ハ助語や

一たどらん人へ分別するへあくぶや

一たゝうがミ　畳紙(タゝミ)や

一たそかれ　誰(タレ)ぞとうかゞふほどのくらさ夕(ユフ)べを云や

一たゆまず　ゆるまぬやゆるむハ油断(ユダン)や

一滝口　あつかの子也　禁中にて滝口(タキグチ)の宿直(トノイ)する人武家(ブケ)
よりとうる也院にてハ武者所(ブシャドコロ)といふ也　源(ゲン)久の番の者を滝口さん
将あるや

一ためらひし　猶豫(ユウヨ)やすらふ也

一大とこ　大徳(ダイトク)や　智ある法(ホウ)しを
云や

一たむけ　手向(タムケ)旅(タビ)する人ニ贈(ヨク)る分
物なり

一大臣の後まて　明石入道大臣の
孫(ゴ)や　系図(ケイヅ)にこゝ有

一代ゝの国の川さき　播磨国司(ハリマノコクシ)
といふ国司ハ一任(ニン)四ケ年とて国司にありてハ必(カナラズ)ゝ
あるや其の受領(ジュリャウ)ごとに縁(エン)につけてあそびといふ也

一大納言のむすめ　紫の上の母也　一たちとまり　色うくハちど云

どまり治まめぞ。家の戸ざしあれバ。さりるべきにもあらぬと云也

一たいま　東の對也　一たりやもれ　みやすさと云詞

まへの字をそへてあり　一大鼓をさへつうらんのもとに

地下の楽人庭上にての役也　花礼記曰鍾鼓在庭琴瑟在

堂　今案大鼓ハ必堂下にて打もの也。以寛治五年五月廿五

日。殿上競馬六番の時。主上ノ自打大鼓給。此時置堂上也

一大らん所　禁中にて安房海のある所也

一たをやき　婀娜　拾仙家　一たんめんかきかゑ　花鳥云

先第五儒者奉作献題次書韻字盛中境置庭中文

臺上近衛次将先探御料韻二字置莒蓋昇自御前

階獻之次王卿堪屬文者文人等各進文臺頭探一字

見之奏官性名及所探字也今案探韻ハ各一字ノ詩也

悉韻字くりぬ也故懐紙端作云春日同賦春夜翫桜花

各分一字應製詩探得其字なと書へき也

一大将の君　大将ハ参議より兼ずる職也源氏ハ此時

参議大将也宰相兼大将例藤原房前冬嗣公常行一条摂政

一大将の君も次第ニ参議二人の内一人ニてあるとせし　花略之

一大将の君もうちそ後　葵上の御はらから源の

中将をもと世にうちも文学のかのゝゝもこゝろされなとや

一たけくしねハ強ちなれハとや　一たきゝこりハ　採薪及菓

菰随時恭敬與　提婆達多

一たうぞるまうなりいや

一たゞこれまでゆく　哥　天迴玄鑑雲将霽　唯是西行月不遷　菅

一たけあめり垣　五架三間新草堂石階松柱竹編墻　白氏文集

一たぎのくちなど　弾碁　後漢書。梁冀能弾碁　和國まではこぬ物や　河妻

一たれかうさ　うつぎちれ心や。露まそへてるま　哥

一たまもなど　海邊にたゞよふ玉裳は後撰に見ゆ哥。女の裳あし　俗をくづしたり。裳は女のきぬにそふ物や

一たうぶいの御子は　太政大臣の御女。髭黒のいもうとや。承香殿女御より腹に生れ給ふや

一太上天皇に　哥　夜つぎ尼に成給しかば。皇太后なども(?)に准じ給べきなりければや　河海　本朝太上天皇ハ持統より始る。女帝や。薄雲の女院の号ハ。持統の例によられ

花鳥 女院着ハ、位につき給ひて院に成給ふ。一条院などをバ太上天皇の尊号とハ申侍ず。但封戸年官年爵などハ差異もなければなずらふ号とハ申侍る也。此封とハ封戸なり。三千戸も各千戸百戸あるをも太上天皇になずらへて二千戸給はるなり。院司ハ女院がたにもすれバさだめて判官代・主典代などや。三宮ハ太皇太后宮・皇太后宮・皇后宮。

一たゞの鴫に 明石上の様也

一たゞひしりつ 類聚・山がらひしりつまでもしらぬ。民・河原・ぐさや・ことひさ同音せしをひと云ごとし。河原ハ織多

一玉ぐつ やがて藤御しんとなや。ちうんハ誓言。道祖神も此説あれバ心りへぶそめぬと成べし

一塔こぼちさるゝも 昔女貞女ありしがうつらそおればへ

のこぐひもきとて塔の壁をこぼちて焼ありしころとみゆ。
寺まで丁こぼちさるをもありし河瀬牧子がかすと云る花かたの中納言
拾遺にも丁こぼつ也 寺畢竟こぼちたるを女のすむべし
一竹とり 拾遺や梅壺方也
一淵房 大覚寺にをとらぬと
や貞観十八年二月廿五日以嵯峨院為大覚寺 棲霞寺にも
淵房あり
一とまさき川ゆへ 禅サノ人の姿
と云一説には玉手袍とて玉をかざりてつらやせ女ハうけ袴ノどこと
一大ぐくのうち 西三条大臣良相公ハ閑院左大臣冬嗣公
のちや大臣の息 太学のかを習ひ本の例也
一大将内大臣にちりあひて 内大臣執政例堀河関白 忠義公 兼通 天
禄三十月廿七日内覧同十一月廿七日略く例ありところ

一辰の日の叢つゝ流ゝ斗　十一月丑日より始若丑二つある日ハ下の丑也。但上の丑にも有例先。丑日ハ舞妓参入。寅ノ日ハ五節の心こゝろ。卯ノ日ハ童女御覧。辰ノ日ハ五節の流の節會の日也。辰の日の叢つゝ、とさゝゆ不審也。豊明節會ハ同中乃辰日也。若ハ五節のわハ打あそゝわて、やゝ明きてゝゝきささゝれ

一たうぜうのつさらうか　御殿本宮本爵也

一大学の家その日　進士注曰可進受爵禄者也　聖武天皇神亀年始進士試帝王系圖　進士及第例以下同　略之　寺一勘

一季あさゝうかハいづれも進士と云也必しもわ中ゝゝのわゝ
れれ云付侍る也

一大まのぜん河　大宰府一員ハよ
帥権大弐小弐。大監人二小監人二。大典二大小令史等わりゝ下弐　叙爵之

時。小御所にて云。監叙爵の時。大史監と号す。大監は正六位下。小監
従六位也。大監は正六位下相当官なれど。従五位下に叙しぬ
れば。大史の監と称するなり
一大ひさ　大悲者　観音のこと也
一たゆきさ　堕涙　史記とちづれところなしき。半臂也
一ためしなも　引出ものべきなり　長根にむすび付くるは根は音
をあらそふといひちがへて。そこぬ涸の浮びとくるもの也
一たきつらくさん　六日。武徳殿騎射そして。打毬の事なり。
唐人の将来にて馬に乗て毬子紙をむすびたるを打毬といふ。其時
奏する楽紙。打毬楽といふ也。納蘇利も六月の競馬の日雅楽
寮是を奏して。勝負の乱声は必競馬にあること也

〻たふるゝ　くじのことなれも同じ事也　倒(タヲレ)也　折れる心也

一たてあかし　やうもなや　一ころめたく　今ハころ〳〵
ゆらりに嫁給ふや　かくといふ事也

一たしぬこひ　逆投(シン)して　あるへき行ひして　隔心(キヤクシン)あるぞとや

一たゝんのしくさ　弾(ダン)くする　組(クミ)あひするなり

一たをやめの　嫋女(タヲヤメ)　雲ゐもろ人かくれ女のまゝこそや

一太上天皇なりあなかし　漢高祖(カンカウソ)の父　太公(タイコウ)を太上天皇とし
給ふをおもへるに　日本にも例ありけりとす

一たいしき　平字也　母いつくまとも

一たいきやうろうずんて　中世(ズ)の大饗(キヤウ)とて　年くるゝぞ
ごぶんの微(ビ)の口賀(ガ)するを給ふ也　花鳥　正月二日

大饗ノ事。西宮記云。大納言白大掛二領中納言同袷一領。參
議大掛一領。非參議四位柳色小掛。五位細長一連云々略

一たしろぎぬ　絶衣濡也　一たぐらして　瞞文爛

一たけくらひとしきせいくらけも同様なり。一説人也

一これ文　心は彼られにの拝代をへるなるを隙にそこひ
絃ぐくる心結ぬるて。又も知べき人はあまれや

一たくむくのあそん　ひきろされ哥を。清慎殿家子草文時也
あかぐくるむくれ哥のかくてとくべし

一たぐく　大曲也

一立ところて　心は彼をさひくく
浮さ庵あれば稍去れ清絃りぐくる揺り。女ニも立てひてきくん也。
されを絃くくべきはよめる絃也

一たりうか　第也

一たきゞこるさんごん　提婆品採薪及菓蓏随時恭敬与

さゝげ給ひて仙人の役をして承奉日夜のさかひもり道をさ

一たきゞこる　採菓汲水拾薪設食　乃至時奉事経於千歳

千歳給仕の功をかさねて久しく行じや給ひしめて

も後の教をえるや

一たしぬべき　こゝろへさかさう

けふが上は佛へ滅されれど常在霊鷲山の心をあり我亦

見彼仏世尊恒説此深妙典　花ちる異とは對てへぞてあらしや

一むしろの　深の魂　このしをまきかんとや

一竹川の竹河の曲をうたひしるせり　竹川のうた

をなく給まにゆらせめぐしくうへてとおりゆくらしむ

一竹河よ　給復ゑしをやく夜のひしとさめすぐるめ

目中土

ころゞぐまつりと給ふんと卑下するや

一 たちふらん 薫出家あらば宮をられまんと思ひしとや

一 たゞつま 象紙の基 紵紙令水楠術縁柱と云

一 猿のやざう 晨鶏再鳴残月没 征馬連嘶行人出 白氏文集

一 たうのまい 昔は清涼にて拝賀あり 今は禁中まで也 拝賀は亭主も南階にくだりて礼する心也 揖譲の作法也 新大納言の拝賀ゆゑ 薫は束帯 白の直衣下がさねめづらしきなれ

一 大史がやれ 大史がまたくと云詞也 がわは許也

一 大内記 式部輔兼ぬ
すとし参べきこと云詞也

一 たけふのこ いろいろもしま

一 たいしやくもくしなず 梵天
帝釈は人をいさとる天也 帝釈は忉利天の主

一樓（タチチ）の　樓のまほふおもふ心してあるべきるをあちむしと云ふ
洞よりひとしめかや　一旅（タビ）ねして　旅ねしてころも
まへれ心のうつりぬはさて嫁は興（ケウ）行（ギヤウ）あれこそあり
一たけのちちく　笛のきやうぐ紙　和琴（ワゴン）よりして引くもの
一玉のさかり　玉結（テン）　毛結　一たちまちて　親あとれ中をも
断（ダン）絶（ゼツ）するる拙をと心待や　一たまされ　殯（タヘ）夜（ヨ）見葬（サウ）礼（レイ）記（キ）式
殯（モガリヤ）へ指（ユビクミ）するる人を亜（サク）家や　殯宴まで　蘇（ソ）生（セイ）しころ事ありや
守治のみこ難（ナ）波（ニハ）のみこまあひなりて拙をののれしるね叶（アヒカナフ）
べきれ　一たまの折からあり　谷よあら家
の軒ぞよろしや
れ

一れうぞて　源氏のめしれうぞや

一れいのざうしき　ぞうしてんちるまき心也れいは例也

一れいまうぐる月日かしのひら　令曰陰陽寮頭一人掌天文暦数風雲気色謂天文者日月五星廿八宿也暦数者計日月之度数而造暦授時也気色者風雲之気色也言以五雲之色視其吉凶候十二風気知其妖祥　応和二年七月廿日黒雲気広二丈許起坤艮康和二年正月五日白雲広三丈許経亘東西

一れうしう宣さもんとて　寮試　花鳥試または史記をこゝろみしものや。これをうけたる人也。擬文章生補して次の行は大学寮にて心みる。及第の人也。

文章得業生を補す是を進士とも云ふ。或は前にて勅試をうけ
られて試らるゝゆゑに文章生を補して後ちにまた方略の宣旨を蒙て課
試をうくるものもあるとぞ云々　鑒

一　れんし　練や　れんごろの心

一　れいのもんでん　こと物あそびの事あれば例とする

一　れいのうゑ　ゑびあげまきの額をいふ

一　れうわう　陵王楽や

一　れいをまち給　毎月八日中堂

までや

そ

一　そねみ給　猜

一　そへのし　そは早や

一　そへの人　おほきこゝろ心や。そへてござなわず又そこまでもれずとも云

一　そゞろくし　悪形や

一　そひぶし　栓組寄

横陣　召

元服の事也。そひかへて女系する　目中十三

一 ろくまうそ 足下(ソクカ) 花人をうやまふ詞也

一 ろを 楚木(ソモク)也　一 それぞれ いづれを

中の字よりて三の字をまけんされ心也

一 ろひかし 添臥(ソヒフス)也　一 ろむうれ 宵(シヨウ)也

一 ろはつさ 側付(ソバツキ)也。ろてゝの物ずきさにして。縦(タテ)あるを横(ヨコ)に

あるをなしてろするを云也　一 それぢめれす。是より馬(ムマ)

数(カズ)が音あらしことを云也。因縁(エニ)と云也

一 ろこはりそこらをあるき心也。ちりはそへてろ詞也

一 ろゝきあけてそくはそくめさあけて也

ろぶろうるゝ事 おゞけるゝさ心也

一ゆふぐれはさびしき時也　一ゆふしきぬ時也　尾ばなかるかる

と云也世様そむくは同し　一ゆふだちいくはしめなら

一その人には　それとしらぬ人さへすき

一虎さびしの声　雁は八月十五夜初て渡也

一うらかれよるずと云詞也　一ゆや　初霜也

一うらづたへん　琴也　源氏上巻也

一まつむしや　さうして云詞也　源の氏出しと云也

一袖くるゝ　むらさき縫ぬさき出さぬ也をあらむる也

一そらのかぜおもへは　ころさうらさきあらくすなるすや

一袖ぬるゝ　ころ夜を袖とぬらす家のゆかとくさ秋らきまし

さびしき心也　一うくろもしこそまでなん

涼の心のそころ立られ心也　一 そのころのハ袖を作るべきこと、儒

者の道者のする也　一 袖久しき家代辞の袖を

翻しもせ、縁ハいづまをとをちし　一 そしうする袖のしなる

そうする心也、細みをつくぬものゝ中ニ上手なるどに袷君出す人

あこゝ也、軒ぶむ心也　一 袖ぐちなまじへうられ物う

等踊亭の時の出しござぬあしられどもし、ところめききつかなと。

よろしくずきさ絡也。袖ぐちこハ、すぐれの下まる也。女房の

さぬの袖を出さでさ也。今の世ニも大饗なども清の儀

式のこと紀し。いづしござぬあるも

一 うてめうし花ちがちとハ泥とひちこうすまつきところ袖也。さて

袖めりくらもいへか、男子もうやきつさ人なるかさる人などころにて、

涙中に押へらる〻抑へれ息所の紙为也ちゃうと云人給也

一 袖の上の玉のくだけるをもれん　未勧

一 そればかりもらしれども　こおびれしともぞれぞれくども

さし〻さくるさまびるとや

一 こちれせうそこ　太郎に妙

一 こうハすらぬ法すりうつやうそ。

さこへや

ふしやこや　琲東倚杖自歎息。織頭風定雲墨色　杜詩

桂嶺瘴来雲似墨　洞庭春尽水如天　柳子厚詩

一 うひえてほそやうるうすゞくれ。俗にそびくどこうろと云許

一 うこそいそれこそいや

一 うびやさ　涼の明石とてれ出世

いとほそやごさけりが。いまはまれくしさくや

一 了れ人るしぬ　寛平遺誡云　令頭ヲ郷ヲ宇　令責二人道

兆其ゟ必令ニ來貢セしむるとぞ・それはおれどもし・又節をまつりまし

とある上下略之

けいやとのかみべし・紫宸河北ニ表

一ゑもんの督がい　諸儒・六衛のと

今日手督司正一人掌調習督

大ろす督ハ仁徳天皇ノ御宇ニ高麗より・わたる・神ハ倶知之

云しとや

一ゑもんのすけ　御弟

叔和なる　大明天皇　侍従を・弟方にれ秘蔵の人・不傳男まと云割書

侍従　黒方　二方

一うれうれ　前の何ヲ羅いつし

わかしてさある・雲井居のかくるさしき人をは・

さう心とるあり

一うむしや　若君・大饗の時・若

者と云ふうき・ふさぎ別てと心得て一・藍・唐粉・淡蒼・齒の三の用・一

あかせぐる者とりへり

一ずくれうのかて　外典をさせ

一 うれしさぬるさ　楽書曰、師文之變易寒暑、滌蕩之感ニ動風雷ヲ謂琴ヲ変也。琴書ニ云、師曠ハ晋之楽官也。工ニ於琴ニ能易寒暑ヲ召風雨ヲ為ニ晋平公ノ鼓之感玄鶴下リ舞フ

一 そこらつらへなく　そこのところともなきや

一 うほうづ　雨の添ふかや

一 それもひとつらき　弄　本説云

正三位、紀陸奥出羽ノ按察使兼行右近衛大将、藤原〔 〕保忠

承平六年七月十四日薨四十七、号八条ノ大将、時平公一男也

朝〔 〕の元結、保忠ハ物語ニ時代ちかし、それをひきて

拘てきらくくるれるすがるところが世中はさりけるそ此人

をおしむといふ

一 うらとおもむけして

栄花物語ニ云、院の女御の御葬送の夜、御車にたてまつ院おほとの

くせまへらんまうすけられて陳氏も吉歩ん

一うれハ八文の変姫て書出故幼少の時よりをあしもちら

一ずくひそら東坡山谷なども二うつし髪の僧在家の僧

おそく詩をも作れり

一ろてあれし中君と大君なる

ひにして秋兄ことゝのへら根ごあとい根ども事なるもや家へ出あるが

根あずらう川は原にや

一やらうまうれとらん人へし好色乃本

者あれバ業のうつらがをすハしあへり

一うよそれ画士をうれりどあれども言ばくさんのしらふや

一うくらり賄賂財物飲送るや以肉ハ礼物を出して

官位よの吉心よや

一うれやましくても言れるや

一うりうれさいのう人　班女閨中秋ノ扇ノ色　楚王臺上夜ノ琴ノ声

目中十六

班女ハ後にすてられたる古扇を、待人ハ不知して下官を待なる
まや、待人ハ心とられたることや、白扇とあるハ首尾そむかしのなや
一 みかのよ うらやむ鳥の 可憐病雀半夜驚人、薄蛸狂鶏三更唱暁
猿猴客
一 袖かれし 昔の人ハこしぬる、
まほひハあるやうなること、句れとは正なくら
一 うらひ 庭もちしぬや
いづれも同心也
うひろくハ旅也
一 心侭一家也、慈殺共殺と待ても侍り大概殺の字あるべし
一 うづろ 坐すずろそぞろし、
一 うう 孫也 王うづし史監そ
一 うまそ なして、文殺ちそ也
一 うしよろと出るやうなるうち 天運のす
一 うハ心あり それハうしろあるや

一うひくしき純 人の姿のちいさやかなるを云

つ

一つゆけき 露けき也

一つれなき 雖面

一つと 集 日本記

一つ 鼓 ほどあるゝ心あり

一つらつけり うらつけりと同心也 つきさ同

一つぶさんざい 清涼殿の東の小庭ニハ月西の小庭ニ萩花也 こ種也

一つれぐ 徒然也

一つらへ あすまる心也 浅ことふとを

一つるりぬ舟 泛乎若不繫舟 文選

一つざつく 次第くの心也

一つらづえ 皮頭 ふらづえや

一つきくらね 官位也

一つれくいるれど 恥る心也

一つるびきて 女ハ馬乗 ばさそきけちるびきなり ことも

れ女をこしらへてかざりのけひしてかけゐ儀也

一つゞきからくりふつゞみもうしろへていゝ笛をゆきくすゑや

一つれ将あさ紙　とかおへぬまで馬をそへてみるやつれあき

とうしくもちてぬきはじまりの将棊（ちやうぎ）あさき油に中将さこそ

んこそがしのめるや

一つゐきり　無風情（ぶふぜい）

一つきしろひ（タクラガ）　実（ツク）也

一つゞら折（ワウジヤウコキ）　九折（ツヾラヲリ）　拵筆子にさそてちるも細いてつゞら折

一つきとめて　早朝（サウテウ）のるや

一つさぐしり　方段（ツキクシ）　様仙

衣筥（コロモハコ）　蒔絵　見延（タリ）甚式

一つまごろもぞて（袰つむ）　襲（ツヽミ）　様

心と下まゆしめか

一つきもきぬ（将まみちのち）　心のやといふ子をさす

きゆくさそて中ゆゐるかとゆへか

一つらさうぞく（かすゐ）　市女笠（イチメガサ）にて

一つかさめし　秋除目也。号京官除目。春除目者。号縣召。各拜任外官之春者太政官廳秋者於外記廳行之仍稱官召　教隆抄　八月也。春はあがためし。秋はつかさめしといひけるとぞ

一月のかほ　雲ゐをさりて禁中なるをいはず。中宮凡其家しかれ。物則天上なぞらへ居也。然せれやとは其家のきせ

一つらゆきがいさめ　時として宮をあへぬよみうる哥あるどいふ紀のすゑあるべし。後まで書ともまかろうあるまじ。貫之いひしことなるとぞ

一つらふるき身のと　欲家まあれば弘理こうとるすや

一つらり恋　秋色をさや。たがさかる恋あるども、とうをたのやも恋

一月のかほのとまちしれ給　月顔似鏡無明罪　風氣如刀不

一 羇愁(キウシウ)荒敏

一 寒に・明石入夏にまゐらするあり

一 つらしきさ　額(ツラ)まくさや中略ノ詞也俗につまくしとの心

一 つらじきさ芽ぢくれじきさ芽や・職(シキ)するなどは硯識(ズイシキ)情力

きわ 旅店(リヨテン)芽や

掃地(サウチ)と・東坡(トウバ)詩にもあり

あわ 煩費(ハンヒ)(ツイエ)

甲斐(カヒ)なるば・根(子)こし山こし風ならし川てんなわる・常陸(ヒタチ)な

ればうらろうとつくり

工(コウ)道風(タウフウ)は能書(ノウジヨ)也

一 所に・亂(ツハ)だらしとけやよくしよみ捨ゆへのこうずとや

若菜(ワカナ)

一 月日(おし)ひかるゝをかゝるに

一 つやまれらいきん 貪家(ヒンカ)婦(ヤ)

一 つうえられさ ところ人さら汁(テキ)

一 つきぬれの山を吹くす風も

一 つるのうちうを(急合) 常則(ツネノリ)は畫(グハ)ー

一 つまじろしのこうず 不審(フシン)の

一つゝましきも我のみありけれバ弄 源太改めたり
て節会（セチヱ）などの出仕（シ）すべきことにもありけるなや
一つみぬ事のある日 放鳩（ハウタウ）の筆には詩なども入て商量（シヤウリヤウ）するこ
ともあるなれやそれはすなはちいへり 河放鳩試事（コヽロミノコト）也
一つら敷 琴なれども也
一つやも又も弄つやは又気ありけるや
一つみゆき恩のやらまで 花見どんば紙の名にも紙へ人もやさしく
て呼ばそれをして紙衣をつまぐ恩と云也 弄 哥人の中諸変（ニヽ）ま
言をいへていもんとや
一つきども 笑（ツキ）さとや
がし令（メイ）日をまろべしとや
餅（モチ）やまゝ
一つしやにてきもくきたき心や
一月日のまつり 女の方への文哉
一つざいものぬ 樣（ツギ）の葉に入ろ
一つみ紙をされて 花 和琴（ワゴン）也大皷（タイコ）

あさはらめをつゝみ紙にいれてとるべし

一つゆやくもるらんや

一ついとかりにかゝるかや

らずと云がごとし

一つもに　遊抱に泥裏洗洞に

一つねらす　不弄初音にさしが

一つまりしき　弾指と云

一つにあらし　秩作大虎差毫もんにあらしとや

一露もしげき藻の中息に中の心は虫の声は笛の音をさらん笛

いかゞなかりの笛の音が指ぬきぬらと云心也。花虫の声かり

ふえの音をはすり。八雲に抄をひかれ給ふ。文選長笛賦に云

蜂衆蟻同。衆音猥積云々　一つゝみさゞしむ人が哯吐に哯

の気をおもすゝや　一月けいおなし　禁中ニ冷泉院

の月をおなじ気なれど涼の夜の秋なりけりと卑下也

一つゝだゝみ 墨染よりかゝる志の深浅ある也。豫悪の時の衣也

一つれ／＼と 虫の声は蝉也。りんじいは人のちまくらけるてや

一つゝちのしつねもも 六条院系孔の也

一つりおう つが蓋也 虫の名也 含二心臓一ところ

一つれうんまも 史記曰。季札之初使。北過二徐君一。徐君好二季札カ
剣一口弗二敢言一。季札心知レ之。為レ使二上国一。未レ献。還至レ徐。徐君已死。於
是乃解二其宝剣一。繋二之徐君冢樹一而去。従者曰。徐君已死。
尚誰予乎。季札曰。不レ然。始吾心已許レ之。豈以レ死倍二吾心一乎。呉ノ
世家ニ

とゞ大臣の哥まゝしきや

一つきあまり 端也

一つてまうし 無よりすゝみ

一つきを 乳拝也

一月まつりいる 後撰第十六月を

うゐらしき衣とはわかきやとや人のきされは以前到ごうき

一つまれ人まろ給　薫大将なれはそのつまれ人とも中将少将

などにも大将まつ人をよびて縁あるや

一つまも山を　浮舟はひたちの前司のまゝ子なれはつまも山と

いふ

一つゝまちにの夕月夜　萩の

ころは四月一日比とさして　やがて七夕の頃まで七日比夕月夜と

あり阿仏記にも七日の月を一日比の夕月夜といふ

一月ことに八日　薬師の縁日也

ね

一女は二位三位まいる后のつぎ也常は上臈の御方など云位也

一ねちけ　侫人口さきうまくしき人云也

一ねたげに ねたむや。妬。ねたましも ねたむや

一わすれ路 あぬまゝに 中河までのゝり

一わびわて 鼻のさゝらぬ海や

一ね ねさ いかゝわて いさねゞとも とや。屋ねゝけらずは。藤

ゆずをおぼし出て もうすとのまくら。草は根に。寝とよくぞう

一わび人 辛丸ちかき人や 一女別当 後家は女別当とし姥

氣式はいひしより 後家別当や 一動今は世にも院家関白家

あぢに おる当の房ぞても 一念佛衆生摂取不捨 観

無量壽經 る 一女房のさゝれん 臺盤一所や

一ねさてるじし路 年三正五九月。六齋日也。天帝釈下ノ月。

南閻浮提あふとゝる姚 一子日 元日子日也。十節記曰。

正月子日登岳遥望四方得陰陽静気除憂悩之法

一ねのびし　祢宜言ねずひるすや。又神なきのうま

一子日なるに　鵞の角白也。正月の子れ日恭餅多し

一わらんべ　ねのびすすむるとて。花猫字の音めてや。

ねうハ女の言通するや　一女ハ猫をあまやかして

河女祭ニ千祭后の業平紀氏に通路しけるなれど。後撰

云ごとぞゆえて後。京極のみやを家にはわりけり。元良の

ひノ親王・　一ねちけものにて　花翁

君ハ行末と後の紀ハ花勝る花なるべし。ねちけもの

云にかへしらぬぐきにさ心や。色好の名まつこそいふぞの所

ろんべきの心也。手ねぢけるハよしれもしや。筝をとるべき

さ後やゝきぬれとハざれごとや　一わん紙よりを　万事ノ家ニ生皆、捨離ニ専心ニ発願ニ向西方ニ　一ねのこれ餅　子ハ亥の日ニ祝ふ亥よ依て。子のこの餅と惟充ク云。三日ノ祝とうの子のことを云なり

ちよ

一たをやかと河柔やゝやりしくや。或ハちよとびゝ日心乳細やかよび

し黎字や　一たいらか　平也

一内侍のすけ　典侍。尚侍。掌侍。命婦よりさ紀のみ便し

ふり人と心うべし　一ちすさんへのすゝ郎子出けん

楊貴妃のすとて玄宗。方士ハ既よ貴妃よおのそ。ゐんざしを

もてくわ。玄宗まこをせよわ。是ハかんざしとなりまて。更衣よハ

命婦ハわいざれがくの名也　一中ろ　くりてと云心や世俗よ

一なまめかしう　嬌媚（ナマメク）　生花（ナマメク）
云けるとてハなし
なまめくは二の心あり。嬌（ナマメク）るを云。女郎（キミ）衆の哥の心也。又生の
まゝなるをなまめくと云ハなまぬるくなまめくしくさはらかなる心也
一なまずみ　よそふる心也　一なまざむらひ　あるれ似たる心也
一なまじひ　眤近（ナツキン）　一なまめ　無礼（ブレイ）
一なまうしろ切りてかとうし路　長橋（ナカハシ）らは清涼殿（セイリヤウデン）より
紫宸殿（シシンデン）へわたる廊（ラウ）也。此所ハ東の庭（ニハ）におりる階橋（キザハシ）あれば
橋（ハシ）よりおりて宮殿へ向（ムカ）て舞踏（ブタフ）しける也　礼儀（レイギ）也
一なよなよ　嫋（ナヨビカ）也又やはらか也　一なまくれ　何やからぬ儀也
なま代人のたぐひ　是ハ経姓（ニヤウ）なきよしなき人なれども
云つなぐなにゝ峻るをつかふ由人（ナカビト）法大史

一なまじゐ　花なまじゐなれば、見ぬもあるまじきなれ心

一なまなか　なんなかなどゝもいふべし　一なずら　なぞらへともいふべし。いふ

ちぎりと云所も有也　一なま絹しぼり　なましごむ

べし。萎衣(ナヱ)也。さしぬきの絹略(リヤク)して、なましぼりといふ也。惣別(ソウベツ)も

しなへたるなどをいひて、ゆるゝなれたるを

一なまじりやりしたる也　一なれぬる　大方はいふ心也。十一

分あはしぬる也　一なみよる世のならひ海　何やらや

と云心也。又なにげなく云心とも　一なまびやかなる心也

一なかなかの人ならぬ　婿心(ヰサゴコロ)　一なまじひ　無二ノ馬(ムニノカミ)なりける、惣て何

りし人のすもそれ何うし、紙なり。をも云。家にあるなり

一なまでひとつ　何すりとも云心也。又なまでひとしなすきあど

云ハ。難(えん)ずぐさるすゐさやおぼじいふべし

一 なかゞ神うちよりかたふかる　内裏よりも右大臣殿の北東へかゝる

くらるや。北ニまかりさゝうじさや。二条院ハ大内より河ニ

の方也。天一神ハいくち。中神ハ中央(チウアウ)の神也。長神安説也

一 中川のわたり　今(イマ)の京極(キヤウゴク)川也

一 なげしのはしも　座(サ)敷(シキ)より下也。はしをもなげしといふ也

一 なまうけ　なまくども聞れうる紀也られもるすき行也

一 なまくるし(うつゝにも)ども　あるくにあるきられ心也

一 なまあらち　無紀あまふう紀の海也

一 なまかはかれんうんまさそ　ひらくとさねのさたうちなるや。

限りけは不分明(フンミヤウ)也といへり　一 なまいだしらをうしろくのけ

てだてなくさるなり　一たゞくしくされつるなり
ある紙さらさ同心　一なすげのかぞ川ひあげの方
さけかづれもあげやうさ後の心や
一なちたらい農やつくられたり　一ますもたうらい　金剛蔵王権
現過去尺迦、現在観音、当来弥勒也　弥勒出世の時、地に
ちるべき金を後もち給ふや　一なすかしの院さんじやう
そこなどのべ家心や、何余院の事也
一なまいめん花亥一劫に内壁時のかくせ参もぞれのら給
后ののゞめんあり、名唱といふ参さるどのなせう給たぐが
ひまかれをさうれてあらうるなや、此吹に滞口れどのなしめくと云を
一南殿のなまに世絶云、貞信公のなす、武徳殿の松原を、貞信公とを

是経時毛の生ざかりにて太刀をとりて引ぐむ勅使なりけると
の多人ハ猫ざるかとや
あらぬ心や
念記ありぬるをとや

一 まずはあらしぬれぬのかくて
一 あまをさり 大かたれるとや第開
一 あまくも 弥勒の世を経り

経ひしを出出経るやいづれの世なれば来世のしるしや
一 なまめしの経教 観音経教、号ニ小山経教ニ見ニ栄花物語。
一 なまめしのさけ 冨士に対していへバ浅ぎれざけとや
一 なまざけあまき人にあちゆれば 成人せバの心や
一 なまなりげなくに いろはや古今の序によりたる人の歌なる
一 なまぐさあれめなすくしげに打ましげなき海ぞさゝなん
経氏の心に袋つぶいあるとざれあるもましげなき経りてず

れうろ事代々をおゝえぬかはぬ心也

一なぞしらばえらびおよびぬを。なまざらうに あそびこ ハ玉くづれるす。をまざらうハ劫(ゴウ)也。つよき心也。人のいやしむべき心也。碁(ゴ)のてうも同心也

一なすびさぐのすち(末つむ) 中古(チウコ)のすちんれはまじ也

一内教坊(ないけうばう) 昔(ムカシ)ハ大内にて。舞伎をうしじ也。大宮といへり。女房の学文(ガクモン)をし。文辞あまりあまるふかといへり。今おほどのおどいふ事ハ。むかしこれ跡(アト)じ也

一内侍所 これをかまさ女房どもれあり事也。内裏に。天照大(テンセウダイ)神(シン)(アマテラス大神)まします所也

一なす代まとじぐちある俗(ゾク)に云を。そのおもてのやう知べし

一なすびちうちろろさうちさ墨のかきをもれバ。後(のち)にらうさいろにあるや

一なをしもらしうん　表裏同じの濃也。花も旧淡也。花上よ
いろ今やうとハさぬをいふなるべし。今やうもゆ
ら表同じとあるをいふや　一七日めをも忘れて　白馬ひつ
きのまや。天武天皇十年正月七日。御向小殿宴
一おにやらひとて　追儺。十二月晦日。除夜に儺を追事也。鬼や
らひと云。追の字をやらふとよむや。儺の字をおにやらひとよ
むや。始自禁中。追諸家　一名とりさればひ　音は名あら
玉茎とは。落花啼鶯。通夫など。名を挑まんしや。石茎などとするも
一内えんなど　正二三月中に。清涼殿にて文人をめして詩を
作らせ講せらるゝあり。主上并執柄。赤色袍を着し。保元
信西ノ行て。後ハ絶たるや

目中挟

一なられほそとれ　十の絃を中に用ゐられたりと云。是ハ一より七まで
ふら絃。八九十迄中の絃と為。中をほそとと云也。妙音院の流ニ
ハ一より四すぢつゝふら絃也。中のをバちとほそくすゝや。大方中
ニ細きをと一心得秘説也　一なすくしバクどもや　内侍と中将
とられ中絶バうろとふら絃おとつやうそて帯をもてこれとやかざと
ハうろろや。帯のさこまよろをくろら。師説句也
一南殿の桜のえん　南殿桜宴ん。ちう外花宴の事見。例多
之。南殿ハ紫宸殿也。花ノ宴ノ例。嵯峨弘仁三。天ニ神泉苑ニ有花ノ
宴ノ事一是始也。南殿ノ花ノ宴ノ例。村上康保二三。天ニ南殿ニテ花ノ宴
宴云ゝ時。探韻ノ例。延長四年二月ニ例也。又花ノ宴ノ許不
らく例。天暦三。三十二右らく地下。許人ぞろりまで。堂上の許

はゞかりさえゝ　一なす代あしじに　此まゝハあしじ

ころら　一なすけさゝらび　玉の出ぬれと

むもとひらむかるすハ吉備公傳りて陰陽在ますや玉ハころの

哥を三反誦て下ぐくのつま代結こ云ゝ

一夜のれるをし　本妻の服も三月や源ハ更衣も結ぎなび

右もいさゝかこまやかなれ心ざしの浅深よるべきなり。

ひもかゝり指るともハ夜のひもの損じるよりてなし人

さゑべし。娘臈は紅の緒を用ゆ。定子皇后の喪に北堂用し

白炎々下襲をハ着しあふしこゝら

一なす代扇風やまず　花周成王の時周公旦東都に入給事を

引出へら在御書。

一なすげさつくわしの　此哥

心得ぐさなし　読抄ハ万葉哥を本哥にてよめる歟べし
能男しなる也　一内大臣になる時ぬ　花大納言
数さしまいりて正になる時りん所なくて権ごの内大臣にな
時くちくるゞハ権大納言にて内大臣をうけらせられてまるや
がて摂政志ゆべきさ定あれどもすなはさ職ハいくどらそ致仕
大臣となりし時也　弄　数さぶまいりて　一勘　数とは左大乃大臣
のすや　依無闕左右のかゝ内大臣の官をそうふ心なり
一なすれをこらハ　流門佑にわりそて中れをこらといふ也　夕
割左大臣なれども未に大政大臣にも成なべきや
一なすまされれれもん　花　代始に八十嶋祭ハ難波にて典侍
の人れ衣をもちて参向して解除するなりこれ難

波のゝ人の例也

一七瀬　七瀬のはらへ今の世ニも毎月ある事也を京の七瀬を京の七瀬といふ在て京中にわかに諸国をよせくる心也　極　葛　鴨　鳴瀧　飛鳥　難波　志賀　鈴鹿　川也

一七日の御はらひ　尋　年始乃礼のすゝや或ハ七日あまりゝ参詣人もあるべし

一なべて世あそれ　世にあれまじき言葉ても男女のまじりあをもじし妻境ま娘の人ハ今もちかひしるせ神のいまふ語あんどれ心也

一ちすらいし　風俗鳴なすなをゝしやおろさもや大家れちくてあるいし　おそれのあらゝし　一段　をとあをそや　をとあせそ　二段　おかか段えんとせやみそれ　三段　或お家と号　尋　不詳也や詞あらあるべし

一 なつさうじを中のあれ障子とや

一 なつかしき衣ゆるされて五節ならで直衣をゆるさるゝを

まうけの宇治左府記に妙音院相國ハ直衣をゆるされずして

無二気消息なるや　禁　六位禁色云ゞ衣ゆるされてハ詞のかゝりや

ことなれバしゆるさるや　一様の説

一 なつかしこのむくろ　さとりいの中ハ見ごとや

一 なつかしきあやめ　柳無二気力枝先勤池有二波文氷尽開

一 なつかしき人ほそなりならずこハ　おもて紅梅うしろ青やといひ

の花も卯花がされをいふとや

一 なつかしき思もいひてぬ　螢わかむかし人のいひけり川ハ

淀まりとや

一 なつかしきわかれ文しるす

若葉の名ハおそしこの葉よりくだり唐衣や或ハ薄萌黄

ご河海よりくる起遠なし

一なぎさこそあれあさくまつさハさゝれ祚や

一夜の月なきほどハ細夜のう

ちと涼しければ秋といひ秋の中もあつさ時ハ夜といふ心や

一なぐさむ名よ立や

一なすびうる　長哥や長哥短哥のうち家々の口伝様々よ出し或ハ三十一字の哥を短哥と心うべし

一内侍のうちれ内裏づくへ　参内なくても内侍の官をアうくうするを

一内侍一所よとおほろかゝて　内侍司の中よ尚侍典侍掌侍女孺此四等の官ヨ霜月ハ女官また内侍のとの内りく参つどふや

一哥 なぎそてく　紫ハをいはさせバさよくありゆへや

一哥 たすぎあさすの　うさかさへびうさかさハ志ぐくなだれ其や

一 廿枝のうらハ なりくらおりや 中々よそ々にするよりハ来てこそ恋いとや

一 哥 おもはらや 唯先女のことく恋ておもひと云名も忘らるゝとや

一 哥 あれまてこし ましき水ハ 志く清水や

一 哥 あまた人の 八雲抄云 出る水をいつしか出る水と云 小井也といへる
小河を云也 さりながら浅てあるをいふ也

一 君と あさましく見ゆる人のまこと ひまてもこゝろ 頼ミ常に人のまこと
てふるまふとおもひて 上臈あるいハ及
かなしきやとよ

一 内親王 哥 同云 女王も親王宣

下まちて号するや 一郭合点

一 あまた法の式 子孫流処

残雪を衙鼓号夕の前 未有塵 庚桜ノ咄白楽天 子城ハ小方ノ城 衙ハ鼓
云々 家のつゝみや 人の未明不通 ちからあるゝや

一（哥）あさましや　源の心ハ千ニ定よの事を隔つ狩の毛まてハおかれ
も心ちあやまりしを敵まを紀の読書よ心のこゝろれハへうう
やうあるとや
一あさいけう　内教あり
一あさましく　朽（ナダラカ）編流
一あんちがちまとも　比叡を拍
あま物ゝあるゝの縁ゝくさしめせともられ心や。悪文（ヲテ）か。中（ナギ）父ま
物ゝあるれとひし相せ
一あすゞいめん（このり）　名對面（ナタイメン）須文行始（ギヤウ）
（キ）養心山技ニ六府次（フジ）相叶下一員（イン）近（ラ）清（ユ）洪（グブ）装束月とら行文司（ミヤツカサ）兼ニ中か
相者ノ。（ヲモ）弟ニ弓（キヨセン）弟ニ僧幸会而を後。主卿（カミ）名對面。家司（ミヤツカサヒラ）清不（エ）脱（ヌガ）ニ弓
弟（ラツクキヤク）寒饗（サニ）座　名謂ハ行始の時あり
一（哥）あすまがろし　床（とこ）を鷹のさとよま
一あすくも
ともをあへり
一あすやうそん　あやよま、おあだ
一（作川）あすのそゝまぞ　行きしもまりすぞとや。ワくさ恥（虫だち）て樟（だ）しうる心

一 中やどり　南柯下人宿を中やどりとせん

一 なきがらもうち　史記曰孝恵帝崩太后哭泣不下　呂后本紀

一 なまだしの念仏　不断念仏あるべし

一 生滅あるうちと　涅槃経阿含経説同也諸行無常是生滅法

法生滅〻已寂滅為楽　雪山童子求法夜叉飢〻に命を身をなけ

へて法をきゝたるに書付たり鬼ハ帝尺童子ハ尺迦也

一 さびしれハ月ハ山より出て山へ入あれバもどらく我も又行来

いりあひのかね　一 やどり木 なまよりれ みて 雨夜宿

みれバ家あるとみてこそ雨夜たゝに庭前霊物降居樹上

詫斎権小児詠此詩作者之中ニ畫字華請琵琶楼ノ手曲

小児醒　宸遊兼武く良也按　こゝ元不生流泉曲

一 よすがし抱とり　出宅　賊呂或ハ

京官の除目以後、執筆をし給ふ也。或ハ除目以後毎三月経へ
もあり、ちん表除目参着事ありちかきさ。執筆といふまや
一 なよらかに 中びかれてもあそんまうとるべき
一 まなこしそて 武官ハめしの蔵 一 あるもの(?)のあはれ
つかそまびいろまうんひろ文まゐるま
一 あすがこまま 三十ケ月の識ま觸や
一 中にいそ 大底四時心摠苦 就中腸断是秋天 白氏文集
一 あまとくねるましのほま 遊仙窟ま女れとひさとさて云也
一 なまようし僧都 横川恵心院 源信僧都ま比さうと
一 まよくそれうんま 法華経ニ依テ称従縁起云々
源氏目案巻第四

ら

一らうらうじ　いとしきなどれ心也。かめうろ心也。かけくともたろや

一らうさう　労あるといふ心あること

一らうがはしき　らうぜきなる心也

一らうのる　廊下也　　一られへいし　羅袁紙也

一らうくじう　良ふかうしきや。物ぐらきやうこうかる心。

　よらうさうの労まされるを　　一らうとめぐれるか　繞廊紫藤架

　交砌紅薬欄　白氏文集　　一らんさう　乱声　らんさうし

　くさぐさかなをあそびらんさうこと一様

一らまれ菊のらんの菊也。假名にいむするは男也。紫苑をいふ也

一らでん　螺鈿。いふはすりてつけたるや。貼香貝といふ是也

一らいしとも 菓子などいるゝ器也・櫑子・樏子・とうきれ上つふ

一らをとらくきこうる指也

一らうげ 老気也

一くるくるとまはる

一らうめらうろ 廊下也

一らうし結 紙ずる也 つまやうじ

一らうろう 牢籠

む

一むねあくまじ むねのふさかるを云也

一むしかゝるとこまるずして 文衣の在世にごとく源をつれて
参内せんとや

一むつび むつましくすると云也

一むほん 謀叛の外せされよせあれ 親主ハ一不孝より四不孝まで
ハ言不也・又不はおゝくをばぬ不といはず・無不といふや・かなも
叛乱親戚を外戚と云・外孫の心なり

一むらさき　源氏と葵の上の若紫を云　むらさきハ紫ハ元服の時
のもとゆひの文や。あやまれハ。家のゆかりすゞ。源の心かゆかりや
男女のもとゆひ紫の糸まてむすぶゆへなり
一むつれ　むつましきや　　一むけに　無下
一むつごと　むつましきことや。親言
一むしのねにきこへる　夕ぐれの涓にあはれふかくし
一むべくさく　宣し姿や　　一むさい　才気あることそれ翁
一むくつけき　物そろしきや　　蠢　貪　白氏
一むつかしき　こころすや　　一むつれて　心もれつゞく
　ひとこと云や　　一むざんに　無盡
一むべ　げにや　　一むねくしかれ　家のむね

まなけていへなるよする歌なるゝ心也　詮　摂の棟梁(トウリヤウ)ならぬ心也

一　むしろくゝんへんくゞへ　三榻(ワ)の明非。或(アル)はよりそひ給しるや

三榻明非は理屈なるものちれなるや(ミコト)　一　むさぼり　貪(タン)(ムサボル)

一　むりし揃紙あるよしにて　寛平(クワンペイ)法皇河原院(カハラノイン)にれ御座の時。融公(トホルコウ)

霊(リヤウ)来て御息所(ミヤス)をとらへけんとする時に。海は治下(ナラ)の我は天子

かやうのゆへに浄(まま)うきくろといへる

一　むしろの戸　室(むろ)の戸(と)　一　むりし摂(まつむ)　うつほのとし

仲忠大将の母也　行女　十五六にて父母にをくれておぼれさる所にさて

うしせ大にして　出たるおまへ声をぬ浅茅に捨すむしん

人としぞいふ　一　むしろのまへをくれ　紫も

あふことあむる摘也。久しくなればそゝぬるゝや。またあひのをくれ

ころ也　一むとうちもしひ口ずさミ
ぶるぶる・ふるへうごかしひ給也　一桝の花れとみえれ山のと
とあ氏ぢ山そて　求ミや。昔日までいふるきの山とうるふ。餘社(ヨシヤ)
ていふ。谷(ヲク)を名(ナ)とうるふや。野風俗(フゾク)の方と花(クハ)まで。求子(モトメゴ)駿河(スルガ)舞
らて東遊(アヅマアソビ)まで。風俗ハ別のまやと云ふ梅の花の歌のごと。ころ
の山のこと云ふへひ指代。ひろちれ家とうるひらふさと云心也。三笠(ミカサ)の森
かりまうわ出ぬへ心ハぶりし便。ひろちあれば。よ思へてひろちの歌といれ
ましふ冬しと見れ心也　一むよんのさうしの伊そあるが識(コリ)
也。積以ハ面うすく。裏(ウラ)いふるさ蘋(ヌ)芳(ハウ)や細長(ホソナガ)ハ幼(ヨウ)少の姿(キ)女也若(ミヤク)
あひだ　手もれ死 花 物まてふろくぶうしすさうをはらるをといふや
一むま場の物ごく 花 物ごくハ乙(キト)屋(ヤ)とて。ただの馬場(ババ)なる。

五月の騎射の時・中少将の着座する所也・葉葵祭・大内の時は
中の陣をそて一条をまへとするよそ左を乙殿の花をる
南也 一むらさきのすそあり 紫の
ひもまろくいろ也 一むもんのうへのけさ 無紋乃
袍は夜穀冬平絹色はつね袍のことし・同云無文の冠其
様ぬ行一吾冠り無文巻纓服着は無文の羅を用也
一むくひもる 当服くすや 一むもんのけさおほし 今源氏
無位人也仍無文也 一むもんやれはさにくしらしする
河[illegible]の外は流くへるかはなるの時も白板の名のむま
金まるくまかはなけかむまやのおさいうゑくしらうつくし
して川くわかへる 驛長莫驚時変改一栄一落是春秋

くりとは口詩也。世にもてはやされて字の上滑也。只今文節に
哥などに流れりし時は。譯純に。菅丞相の詩を作られしかは
あすまくへかりしや
一 ながれ行く人ぞ流人
のかくれたるは。菅家をさしてなけれども也
一むかし はるかしてなんしにも
一むやく 無益
史記曰。大名之下久不居。後漢書曰。位尊身危。財多命殆。
文選曰。木秀於林風必摧之。行高於人衆必非之 運命論
一むかし母君のはゝおぢ中務家 醍醐天皇の子中務卿兼明親王の左
在大井川に式部親王と。明石の上の母君の祖父といふ
一梅の花が枝にふ鳥はしびちびひうしめさきろさうきうれしや。白氏
うぐひすのこち梅はさくらちれを重ねるや。これといふはむかし記也

こき紫のうらくるハ光色(ヒカリイロ)あかてうつくしき也。紫を白ニ重ね

れバけうとくこゆづき也　一むらさきのゆへ　むかしハ深の紅

むすめとや紫の一もとゆへの縁也　一むねにきざゝるおどろこさく

事こゝろや　一むらひ火いくわて人の腹立(ハラタツ)に

我も腹立るすや　日本記　日本武尊(ヤマトタケノミコト)。東夷(イ)をうちし時野に火を付

られ。おるさとよりをも火を付るすや

一むらし抱くるわ　住吉(スミヨシ)の抱気の事。彼嫡女(ノキウヂヨ)をバ。父ハ怒(イカリ)てさいしり

ご継母(ケイボ)(まゝはゝ)のいひしなよりて。そろうま殺すすや

一むらのおまじなくらし　後撰(ゴセン)ニ云大納言国経(クニツネノ)朝臣の家ニ侍

りけり女ニ。平定文(タイラノサダフミ)いと忍びてかよひ侍て行末(ユクスヱ)まで契り侍り

けり此比(コロ)。此女ニ贈(ゾウ)る歌本院ニむかへられて侍りバ略そしすや

舟夜のうぐ

一むしろにはかどいは　かといひけんとは紫のゆかりともいふうけくと

めぐし。松よりまでとは。松より咲こす梅あればや。松を待まよせらち

一むしろの例をあげあて　旅あげあての詞に。政不政の二の心也。

源氏は出君太政大臣あればそれをあげあて院司など補せし

むかしの心也。又諱は太上天皇の昔の例をあげずして。院司かな

ご覧ぜられざらう心もあるやとて　一むしろにはの雲に　慶雲音

星とて。天下一統赤瑞よとゆるすや

一むかしもやうあらそらひには　是は嵯峨天皇の女むすめに多くう

しるしをえらひて。忠仁公を聟にとらすといへり

若上

一むこの大君　嘉祥の聟といひもんとすれば。太上皇也。又太上

皇といひもんとすれば又臣下の聟のあつかひあらこいふ心也

目中卅五

一むかし物がたりをも。物えらせられを。花七大寺罪あるあとん
御誦經物。切經積を施入せられしするを引もと
一むかしの世にも年寄らるゝはめでたくされるや
一むかしゆるしの先二院人の御湯まいらせて後。御むかへ湯ま
宣旨まいらせや。先明后上のまいらせする成べし
若下
一むまそひ　馬そひは苗時中宮ほどの者と云々
一むかし人はあそびをあそびし　楽書云。琴ハ動天地感鬼神云々
一むかしの女房　無心
拘木
一むかしの世にもあるやい　伊勢物語に。業平の二条后をぬすみて
おそろしきまでや
一むかし物がたりにも　さそく高橋
あとかくるす成べし
一無言太子　沙ニ云　無言太子波羅

奈王ハ名字。名休魄。容端正。生而十三年不云

一むすひそく又ふをさぐらなりとも法花経よ焚て中へ入れ

一ドさなり

なりと云心也

一むすくしさすぎ 塔にさされむ

一むすし抱がらわ うつ木の物語に。

もしけりむすびける。独みて琴引しを。今の君といふ人こそ

しるあるも

一むすし 物ばゆりへるをもて

又 漢武帝以董仲君ニ李夫人ノ貌作温石ニ

一むすし別をかなしひて、かへりねを

観音勢至同位の昔。人に

子までおりしまひけるに。継母の為にいざされければこれお

やのかきねをくひまかけて。つゐに仏道に入給也

一むすしハ生田川の古事。女人まて二筑元 大和物語にあり

一むかしいさこちひとし　或説云昔染殿后皇后にれたるやこの时金
峯山より文殊修練行者来て加持しけり。平愈の後本山に帰て。
年来の行業を廻向して鬼となりけり紺青鬼と云常に后
をなやまし奉りけれは。智證大師ねんごろに教誡し給ひければ。
紺青鬼もちかふ事ありて。京の在所にありつきて一夜のやうに成て
ここにかの後后のぬに如給ふと云ゝ。皆押出代記にみえたり

一むかしまおとこのうち　侍者あれこそのすまま

う

一ひとつ人　天上人也　雲客と云も同し。大納言中納言よりしもの人也

一うちはたる地かく　每夜拝賀を云也

一うちもしけるかみくらまりこゝに。おやとなれはかはしろして

ゆ源しろ橋也。源氏のきりめんぼうに。枝をおりもちして
よぶといへり。又村上の御時宣耀殿の女御と。淑景舎の中宮は御物
ねたみのまじはりありけるぐの人々かしこまりて。不浄を
まきちらし侍りけるを以ておそれ送りたまひし人のきぬのすそ
をよごしけるといへり

一こゝろづくし　対屋あまたぞ。殿上
ま局をば坪と云也。又中宮まうのぼり世話切れ。清涼殿の二間
を上の御局まうふ也。ひのやまとれるうちに二局を上の局を
いふなるべし

一内裏　内書也。此御殿ぞ内
こゝにはまるか内裏の事也。一所をまもりておはしける殿の内の事をいふなるぞや

一うしろあやうき河　影護心もとなき心也

一うかりけるされいまろうか心也。藥の字也

一右近のつかさ　禁中にて実の一刻より左を宿直を始てさの
まて子まで門をまもるや。さて左と来まて丑の一刻より宿直をさら
しておのかすがや。さてまことのおよひ声。丑の刻ノ始めつことや。右近の
日ハ丑寅まで夜もりや
じこや
一うけひくまじき　承引すま
一うくそぞ始めべき源をおまら
かのはらバぞうずきし人のおまえんらや。文ことぞ切ってハうれず
始めべくさとや
一字多代代門の代々のまし也ん
寛平ノ遺誡曰、外蕃之人必可召見者ノ在簾中見之、不可
きて河海ハ家の詞なり文と遠と云つし。若必の字ハあらずして叶
まじき時の事也。然ハ打ましてめすまじきとさしてうら云ろ
一うれかうまうれしや
一うけとりて諸受咄おぼ書の心

一うへ人の令娘　御令娘（ゴレイジヤウ）が令娘とて有。御妻は何條する御令娘
とひ。それを上（カミ）の令娘と云や。が令娘ハ殿下の妻なるを云や
一うちはのこまひよう　内裏のこおほくなる心や
一うちつけ　やそそしまるゝ心や
一うめさくら　気はあたゝかしとや。又詠（エイ）をも云。所はまへし
一うれしなみ　喜悦（キリヤウ）の人といふ事や
一うしづる　海の色や　河海類（ウミツラ）。
一うつろふ　人の心のうつろひうつると云。又まれ成[illegible]
ことも云や。月のうつりうつるや。又月の影のやどるともいふや
一うちあづく　収納（リヤウナフ）するゝ心や　一うらみ人　他（ホカ）の人　疎人（ウトキヒト）や
一うつろ　うつりぬるや。又うつろひゆく[illegible]事[illegible]をいふへし

一うしみつき　何心もなきと云詞也。うしみつくと同し。心みつく也

一(哥)うちとらふ　嵐さそふハ。大足定家のうちとらせざりしころの事也

一うねつき　辨(コト)すく也　一うそうそ　うそうそ也

一うちうらみせん　うらや。うしなど彼打(ウツ)也

一(うらうら)うれらく　うれりしき也。うれらくと同し

一(哥)うつきの　月をへてとハせられまゐりけるを。月をふと云也

鋭(セイ)(モスクル)や。人らしも　蝉(セミ)のなるころまでと

一(哥)うつきのなる　伊勢集ニ。深きくれまゐりせされど蝉(セミ)也

抱(カハ)なく家のことく。志のびくま袖をぬらすと云心也

一(哥)うづまく(タツノ)(ウ)　優婆塞(ウハソク)ハ俗ながら仏弟子ニ入也。当来(タウライ)導師(ドウシ)

怖をおなじ声(コエ)きこえて。五十六億(ヨク)七千万歳(サイ)して。弥勒(ミロク)の出世

まてのちぎりをかけて忘れめや　一うすむしろ　ある人を筵(ムシロ)にて

つゝむ外(ホカ)にうつほや侍(ジシ)にはうすむしろをしく事も同じくし乞

一うちうつくしき夕がほと源氏の衣を夕顔(タガホ)するさうし

おもふ事や　　一たとへ夕がほならぬ身も娘(ムスメ)もはら

毎もまくあはざるや　　一うつせみの世むなしき世とや

一うどんげの花にかゝる紀　優曇華(ウドンゲ)にあひがたきみとこそいへる

一うちすてゝかへる　花見るればくもつくろひゐさ海あるま

一うへにそひたる　うへは花(アヘ)うへとよみけるぞ初や

一うちき　御(ウチキ)大小あり御家(ウチキ)一の人或はあるじなどぞこれを着るとぞ

めのこは表着(ウハキ)をきて小袿(コウチキ)を着る寸法(スンホウ)は次第(シダイ)にひとへをかさね

めでたしや　　一うけもちげ　呪咀(シユソ)しのろふ

ますといへり

ときみだれうつしたまふや

つかさはらに蛇気(ジヤウキ)をしや

浅海や

一うれしきねぐら 涼風のつゐ

一うれしき心ちまそ 涼の夕へ

一うらふくるゝ びんにそへ詞かれ

一うね人 女蔵人 詞 采女(ウチメ) 女蔵人

とはうまいひまれど・女蔵人は采女(ウチメ)もあるまじくろ女官や

一うんめいそん 詞 是は中将宮へ将の方にある殿(デン)まで・周得

所のまします所也

一うつし心 現心(ウツヽコロ)也

一うき身世 哥詞のこん きし方は筆腹(ハラ)までも鶴(タツ子)のすぐさるすあるよ・君の

まし鳥とあるは君のこずゑ鳥まじくろのやどうちらくるや

一うれしさ袖つゝ それ人の声をはなつるをうらわしさ袖つゝ・

かゝる朧(オホロ)月とうしろきさしめ心をかくめるを

一うきもんのこしのことは　秘　今案、童女ハ晴の時も打袴のよし。
表袴をうらうきもんハ窠霰也。これつまハこれ袴をさしぬきて。
打袴とハつやひきたれ袴也　一うんりん院　河雲林院ハ淳和の
離宮也。仁明天皇の處分なりし紫野
一うつしごゝろまで　うつし心、まことの心也。うつし心ならぬハ狂乱也
一右近のぞうの蔵人　右近丞の蔵人、中川紀伊守か男伊与介
がうやく叙爵をへたる。源除名に依て、結句札をけづられたる
一海のなかまでみすまの紙ひきちらしたるやうなる　定家明月記ニ云、雨
脚融地電光張衾云々　一うみにいますかみ　是ハ彦
火々出見尊を、源氏ハかくいへり。龍神の豊玉姫をおもひよせし
をおもしれぬのなまるすまへてかける也

一哥 あし うらゝまい寺の 花 經昔明寺ハつくし橘の小戸の檍ヶ原ときう
ひ出ぬる佛なるよりて海まい寺とハ申侍る文海中ニ釣ヶ
まれそのかうしみるあれども誇ゝも寺といふんまお造

一 あつまじきや八百会ハ八重のごとし

一 海まつかうききにのかゞ 花 告根哥方士ヵ攫蛇をもとめ
しけのすゝ上者碧落下者黄泉ともいふごとし

一哥 うらちかくもなひ松よりも波のこゆるハ末の松山よりなれと

一哥 みかつて うちつけのなられ 花 なつぬるといふおしみの人のすそをいふ也

一哥 うくさ松や 海松とは うみのゝことや

一 うへのさゝめのさゝうくまき むらさきもおけもみどりも経る
らそ浅深をいふや

三

一 まきふ うけん人をのまずといふや

一うつほ　物語也　　一うへの女房まへさまへと　上乃

女房とハ典侍掌侍等也　前ハ左さまへハ右を云

一うちわね松にかはしらう　花　文選に馬鬣松とそうらひ松と

いふこと侍かる鬣ハむまれそがれしごとくきれをするどに川さ

ふりはく絵云也そのつゝるあひてる松をとうちね松といひてを

へいつれ松をおきさ人の形見とうろうとく中ねの君をむら

されの人のこゝろところ心あちゝ　略く

一うすびきさ　さむさき神也　　一うへの女房　等同前上人さ

集るすゝとうへのめ録と云と河海にあるをそうや　一動歴し

上人の集るすゝハ大内よりの心也

一鶯のさしづる声　舞ハ打紙れど古院おりしまさぬるすをむつ

れし蔦とうる絡

背ハカニよ及ヨヨばぬ心ざしをあそばしけるや

一哥玉くしら
うき洲を　うき洲ハ離ハナス君京ニうき京と云心也

一うきされひらくめく　うらまきや

一うらじれ　嫋ミヤウ寒ソクうら河寫也

めくろ草子や

範カミノ文集

一うつまれ夜もしられ君　夜氏よあらず一世源氏の人の女也是君イミヤウ也

うらかの物語よ夜源氏君とて一世の源氏まで太夫将まさまら

と云人ミ玉二人まちのくらけり一人ハ太政大臣の娘ムスメ一人ハ时の

九門のれのまうと后キサイ服ノハラの女一の皇子也九ハラ服の九よあらうあて

一哥
萬れむし

九ニ剃セイ戎ヨ代乃

一うらまくら
君京の哥をあら

一哥うすこおり
柳キヤウ繊ニ諱ブ勝ヨウニ池イス紅レ

一ここのうらづき
雅ウタ系寮ツカサ人や

おそござるとや。さめ心ずれゆへりみれば。出家をとゞめおきて。時の
いろく字持(ツタ)へて心をつくすまつゐちる人ぐ。心つよくて。出家(トウゲウ)
へまわめぐれバ。源が物と云人ハ出家して山に籠(コモ)りておこなふと云ふ

一 うら松　かゞり火　松炬(セウコ)(ウチエツ)出てちりそうさい松や。かゞまるかへくとまず希や

一 うらさるゝ　のぼらさし　うらかつきや　一 うすつろ　紫のうすきや

一 打こし　哥ことゆきし　打霧(ウチキル)や。くもる心や。行幸(ミユキ)雪(ユキ)をかくる事

一 うかれ人　夜なく風　やそでと云心や。打つけ月心や

一 たとのぢんのことハる　梅うえ　蕭和(シヨウワ)の九時。たを陣(ヂン)の九滝の色に地る
うづら。後代(コウタイ)相伝(サウデン)して。其家をつぐ人をと云る

一 鶯の声ゝや　哥　鶯の声とは。郢曲(エイキヨク)のことや。心ある人家に。業(タクモノ)の
ことや。又玉かづらにもあるかれし。心得べし

一 鶯にねぐらに　笙竹とは落梅の曲のことや

一 うぐひすされたるとし　うす紅田のあとしやりしめきさえとも

唐綺のことや　紅　白さきれぞとはうきのちぬや

一 うぐれ法しのこゝろ　宇多法師和琴名物也　以褶作也

一 うちまいり給人のことをまねびて　女御などの入内の時をまねびて院の御門より中宮の御方へ御消息などをせさるこゝろや

一 うすえん うすずゑや

一 門よりかれうぶやしなひ物子

一 うへの衣のいろくけぢめきそ　河

誕生の時は父の門よりうぶやしなひのする例多し

四位紫次位六位緑袍也とる

一 うしろかれかさがにさらすし　若紫の御うしろは紀ま出ておれぞのう

きりまのうりくろき海や

一 うちまきあらし　米をまき

八会もおどろかすや　一 浦鴒の子が此鳥所のちとをき

数丸は持ぬ心ゆゑ豈りうち。古ころ爰へ心をば不許付兵紛在

まや。浦鴒の子　見河海　一 うくきひ文さしまうろいまん

も小笠まてつれなかしまれ宮てさしまうろや。岩うどい天の岩

戸はあけ段をまをせうち　一 うま星と今夜九ニ云。主君久ノ

御史服一年　一 うきさ世はいゆきてえあん天坊

の字は心学。害をまをせうち　一 うくてうし此法の時節在之ノ

家はゆづりあひしハ二条院。うらは六条院や

一 うつしを焼物のするや　一 折すゝひゑひすゞひ渋紙くや

一 うくひするも　驚声隅引東ニ花ノ下一草ノ宿物留坐ニ氷遍

一 うるぐくの名は　哥ハ付物。曲ハ楽曲や

一うちすてゝ　此姫君遊のあとをうちすてゝかりのこの世鴨のこ
はかせおくかりの子鴨のこや

一うちめしとふ　うちめしとゞむる詞は世話にうぢうぢと云詞はあそれも

一うき鳩の　陸奥守はて下し時のことをいふ

一うつし馬　移の鞍置馬をいふ

一うき世には　我方に山居してもうきことを一説やうる
まるしうきとや

一うづち　持統天皇三年正月
天皇朝万国節殿乙卯大学寮献卯杖八十枚卯槌の字段
卯杖と同じく年中此悪鬼をはらふ心は杖を用る年中行する事

一内は文　内宴

一うどねり　内舎人とかり侍の事也

一うつきふ　うつきをうつきを見せ

一うきぬと　うきぬならひをいふの

は世にまたあり抛ちれども。ワカにはすこしで名をまへ人あすそ
は知るまれなひあると決定しあふまゝなる
一うちこれ人めして 成佛得位の人や

の

一のちのあさ 七月くのさかひや
一のわきとちて 八月比の大風の名や
一のりの師 法の師 三周説法の首座や
一のきのつま 軒のつまれや。つまは抛のをしを云や
一のちのわかれ おもひかぎなき 行末とをく用意あるや
一のちの世のねがひ 後の世のあかさ庵も 極楽の教主阿弥陀乃
菩薩のるや
一のちまうでするを 七十八賀の

時に世のては政ハたゞしき世の人といふ也

一のりゆみ 二月に是を以て 馬をもしらずて歩射をかり弓といへり。正二月の弓をまへする事を三月まで延引ありて
三月も藤雲女院の御忌月なれば又延引也

一のわかての世 あらかての世といふも同じ 上古のこと也

一のわかうし 学たれ 御息所とハ、おなじく煙となりん地をいふ也

一のわかうし のわかうしと八給の御位のうちれ。然るにて めさるは
別かれ。余世をおもひするをおそれとおぼしめせといふ也

一の弓もらんくかあらし 春弓をとる事。礼記にもをそれ也
正月賭弓とて。情々との大相星弟子にて還饗行へよりいふ時
勇者大臣にて勇ぐる也
一の浅まけてしも
川端未知

旁在生利只尺そて薫るるを　一の袖ろけてしも　川崎　未詳

目卅四丁

一のり物（やうらま）　擲責（ダウブ）の乗物（カゴモノ）や。よろきのり物をとめべきれどゐは女二字の寄
その縁や。菊賭（カケモノ）らす　一のく（うき舟）　をとのく心や
一のりれしと（善代浮橋）　浮鶴（ソウツ）を法（ノリ）の師（シ）と語らるゝ。初めひきらくれ浮舟（ウキフネ）乃
るすそふこまざふぞや　一のら　野原（ノハラ）や
一のきせ　盾もせ寄ども云も後（ケン）や。せ（セハキ）ぢらさ心
一のどめ　長閑（ノドカ）なる心乃

く

一くろづき（ミヲツギ）　おさめ發　肉醍醐（タダカナ）　納發（ヲサメヨリ）　荘嚴除發（コ）　醍醐（ダカナ）ゝは御室（ムロ）
と垂（キクヨロ）而や。おさめ發ゝ諸（シヨ）國（コク）よりもまいりしものをおさむる而や
一くろおりなし　退屈（タイクツ）の心や　頽（クヅオル）河　頽堕（クヅオル）
一くしあけれでうとめく物。ここおぐるゐえや。河（タヅグ）首（カシ）ゝ女の更（カタ）し

衣下(イゲ)常(ツネ)に髪(カミ)とあぐるは髻(ホンギ)や。鋏(ハサミ)釵(カンザシ)なども也

一寄 くもれる人も 染中は涙(ナミダ)にくもれて月とはならずるは母(ボ)君あき
ちよふの宿の月はなまこうぬしんされ心也

一くまれおや 王親(クミノヲヤ)・国母(コクボ)といへるすあればぬべし。主国のおやとな
るは六条院の右上天皇(ダイジヤウ)の尊号(ソンガウ)をえめへるこし猶以へちこぶれられ

一かうといはずまれ浦(ウラ)人うつされめへるや。おほやけのれうくさめさは摂政関白(セツシヤウクハンパク)
の天下を補佐(ホサ)してなまうるや。謀氏表はつの尊号(ソンガウ)をえめへる
しるばおほやけのれうにめよはそのわうふ(サウ)と云也

一くをんさ 冠者(クワンジヤ)や。元服(ゲンブク)する人をいふや。くをさと書るも有

一くさん(きこえて) くさすは下(クダス)や。或腐(アルヒハクタス)なるとこえべし

一くまるげる くるなやや。くれなゐとなるまされ浅(キ)也

一くさうひ　経也

一くすしうん　くすこうろ心也

一くろ拙　草子也。桐子の轍也

一くろうざぎましく　おもいはる
也。極心は実なるへつまりやうはづまる心。是を対しておもも
まさしぐけるさへくるぐ心也

一くびゆそし　これりしげまる
とれ心也

一くれなゐのて　袴の腰也

一くちおほひて　袖までうやとくしきる様也

一くれがし　なまがしくれがしられれ。と云心也。くれぐれ日

一くるぐしし　河　細砕

一くちずさひ　口ずさむ也

一くさんさく　眷属也。けんぞくとよむべし

一くつま　さう夜のくつま也

一ぐゑんもん　願文　是　重明親王
家室藤原氏四十九日ノ願文。後江相公朝綱書之。見ニ文粋一生ニ

者必滅釈尊未免栴檀之煙楽尽哀来天人猶逢五衰

日記ニ載之ノ詞也

一 くら人よりとうしかうふりえうる

爵を賜也。五位より爵位の初なり。蔵人は五位にて一﨟本[illegible]

なるべし。正月五日ハ叙位ニ。六位の蔵人ハ必叙爵して従五位下に叙

せらるゝ也 私云 蔵人よりとのゑにまゐりて[illegible]

一 くらゐ[illegible]て 功也。[illegible]の[illegible]

ども[illegible]と云詞也

一 くらしよ[illegible] 百済国の[illegible]

声[illegible]也

一 くもそめて[illegible]

[illegible]早下の詞也。げせ[illegible]すべき[illegible]

一 [illegible]人に心の[illegible]

[illegible]れ心也

[illegible]と云ふ[illegible]又[illegible]

一 [illegible] 偃陪膳女房[illegible]

めくしおもしき杵也

一くもや　さしぐさと云心也

一くれなゐハかり　紫のうす也。紅梅のうすを云。紫の花にあらず也

一くれくしく　くすり人のすそをいふ

一くるまのどう　轂老子曰三十輻共一轂ト云ハ者車輪之正中ニ而為輻之所ニ湊也

一くやしくもくさし　あふひハあやさあるぐさなりとて。実ハ不実とや。されバくやしきとや

一くろきくさみ　黒汗衫　女房服者の装束

一くちんざうれもの　萱草色黄色也。服者着くちなしいろ

一くろぎのとりね　被のつさくろ本を云也

一くまつ枠　おとぶらいしハ　実の心にていふさしや　深の縁まづくさんとや

一くろきれ車　服者ノ車也

車ホを云也
きぬ焼物の名也
はいまうてあくて除名とみてきうがつきあどとろきとハ除名とらす
也然并あをこのろくあうさろれろ官位を奪のぞこそ無位の人
まるをらすを云。深氏も除名せられしまうわて、無故の其長とさ
あふところ、配流の人をバゆえ除名すろうす也。除名ぐろうそて、
流罪をられぬうすもそぞれハ罪の軽重まろうずす也。深氏の除
名ハた近の例を用ゆろ也。菅丞相、高明公、行平、周公旦あどられおし
ますとりて其てやミミ
参の行法也
かして轅をおろしてや

一くろがうはせつこそ　黒箔蜜を
一官爵ととられす　深ハ流罪
一くやうがうくもこそ　三密六ホ
一車ことうきおろし　牛をとハ
一くしけそくこれきぐりのあこわとこ

のちに 梅若中将香童若うちぶられ若のうへの上にて
は髪をけづり時おもふことし給へば、筥の名とぞなりや 云

一 くしもちられみに くや姫に心をかけし人や。蓬莱山の珠到らすを知
ありて偽りて作り出して玉の枝を造りて姫に見せける時、玉造
みなくみの者にて禄のかたこと(を)せめけるにて偽あらはれて無曲なり
き、行きも物あはれにあり

一 雲の上人は 正三位の袴にあり
すぬべし。呼 無清の思は文正三位の中れ人あるべし

一 くしねらくくの初り世るめけめる人 金光明経曰獨抜而出家
仏正寛老子経 功成名遂而身退者天之道也

一 くろに 苔丹や。杜丹とも云。皮の類にして

一 くきなもちくあつさり山陰のゆそちかづ あつさのみめのすや。山陰は

面かち栗、裏紅梅なと云、是やまゐもあるさまといへり、

一 くちさきハねりのさひしきさき　色ハうすくぞめのものなる也。すそハずへハ黒くするや。さいハし〳〵ハさやくしともかくや

一 くすだま　昔武徳殿にて五日の節会行れて騎射の事ある時、宮内省典薬官人あやめの蘰をさし又内侍薬玉を太子已下に給ふ時、くすたまを左の肩に打かけて、左の脇へいれて二の緒を分て腰にゆひて各拝舞する也　続命縷と云なり。只命を延るいはひにする也

一 草わたとひくちの海　草わたとハ近江に我身によそへる也。ひくちの海のいさこそさしは浦波に立いそんと云へる也

一 くろきあかき　波あらいを黒木、波せけつりを赤木と云也

一 ちいく　古き島縁　延喜四年九

やく行幸の時。舞人左右源後春とれ使まて維一枝中多人出まを
めくらる。行の忠なるし
世人皆濁我独清衆人皆酔我独醒

一ちり切しきにうられ一ヶ月

一くゝ人不　舞人不舞とまあり是ハ六条院のなるし

一らん悪らう　菖衣香とれ売らう月

一くりあけの内侍　一説云　内侍なる人のやく役をいとむるや事

一くりん仏　国史云。承和七年四月八日請律師伝灯大法師位
静安於清涼殿始行灌仏事。推古天皇十四年始毎寺四月
八日設斎会　日本記

一くゐしるゝやられ度して
薬師ならのやうまれすちう后君のまかね給まそいくら

一くやしくそつゝ彼　摘さ罪さ彼兼ゐる詞也。罪をつくる心也。除

氏をバ神よろこびへゆるすべしとてあるきをと。渡海志徳心也

一 わすれ艸 今案 山城国愛宕郡之内。小野ハ止觀義也。栗栖野下社也。寛仁二年十一月廿五日陣定ありて官符を下されおはりぬ。此栖野よりよしのにさかゆらんと云ハ此所也。宇治郡よし小野栗栖野をなぞ。それを云におよばず

一 くれなゐの色は 紅は深襟を服の時ハ黄ばむに染て一春の間重黙の服をさるなや

一 くちなし 九重 宮中 家中を わすれじとむすびし 毎説

一 くわうくわう 昭者ハ倚廬とて板屋を切さげて、おりしはする倚廬の内ハ日月の光もあるらずとぞ。礼記問喪篇 寝苫枕塊哀親之在土也

一 くずれそめては よしなれ女の心さげ初めれバ君をもけるぞ

一くつれそめては よしれ女の心とけ御ゆれハ名ともけ付る也

立田川はこうさつゝん路也

一雲霧を 雲堆王宅ノ地人ふの

心元。纏繞の中はましつゝ姫人へやりとちる

一くちつしつて 軸ぢとも。陸ごちそも同心也

一くさとも ひさちの上の共のしうされうつすといくち

一くもんきる 参教也 くもんずとおつ日も

一くどくのむらのよ 経信する人のすや。面目慈鍚厳為人所喜見

法華経随喜功徳品也

一くそくち 摩迦 古今集の序

者ハも。くそさつ名也

一くちまるどの 死灰 槁木 枯

一しわおるゞ 官位ハ發心の媒とそ也

しうの心也。拐うされしく無心しても心

一雲のそうつま 横川ハ雲のしう山ちれハ。此おしらはそもるとこう。

山風吹とも又とひのへこえまで

源氏目案巻第五

や

一やんごとなき　無止事なれ共や上臈貴人にや心ハ位
高き人の事ハさしとられぬ物なれバやむごとなきといへり

一楊貴妃　長恨哥さ引
腰狼將之

一やゝたちて　やゝハ漸也

一やまとさう　和國のさうや日本
わ人のすや。前ごやまとわ人なきをのひしむ筋目とぞんし
ぞれ也。嵯峨仲徳。光孝天皇とおしはかしハやまとおや下
の詞也。わ人ハまなしにこころよきとハ。高麗人のすや

一山がつの　山がつハ賎を云や。山がつの卑下や。極みハおまけるや

一やゑうはややらしかうら心也
一やゝやゝいふ声也　一やゝ　是もやゝいふ声也
一やむ　やむ。止(よむ)や　又病(やむ)や。下はまきへし
一やうきゝも。蔵うらと同し　一やうめいのすけちかき人　揚名介(ヤウメイノスケ)
ミケのうちすし一つや。新撰古今雑中(ザウノ)。源氏物語　揚名(ヤウメイ)介(スケ)のうちを
冬　守(モリノ)忠ち朝臣　十題傍とて戸送りけり藤原(ノ)雅(ミサ)朝(トモ)朝臣
つくへと行てもまよふ夕ぐれの宿あはれありへくもあれ
冬し忠ち朝臣
かあてはまされとぞわつてゐまきらぬ夕ぐれのやど
昔よりも秘(ひ)すとてしらぬ　一山ぐちも若のけまい　古今の序の
句也　一山のもれ山のちは深まぬとへ。

月を残しても
一山びて　あまびこ月、俗にこむ

とつかれや
一山へ山とぞつくべし叡山のことや。

寺とつくべし三井寺と知や
一やらう　風廓やさらうしとぞ

一やよひ　三月以前の月もやりけてよむや。弥月としつる。

二月へきゆるさ、四月うつきぬ月そうさいつれも山執や

一山がつさ　裏山吹のさね、八重て黄ニ裏紀や。籠山吹ハ両て

栫繁・裏葉や
一山の哥も、おざなり　琴のさる

へとさて鶴雲ゐろうんざう池の葉もうつさいつすある、

一山ちよまあいわう　らうまへ尾花のつせ鶏毛ぬや

一やらもえさうす　是ハとむもえアしゆるや

一やしまめ　乃ちて神とい池紙と書や。山紙と書ていハ、山づと

一やうの花とおもひやれもれ

花と読(ヨム)やかさは芳名(メウ)や

しや歌家歌院いづれもおもひやうに心づくしなるをとら。

花去年(こぞ)の九月は歌家の此くらかに心をつくしぬれ今は又歌院の

ゆかりよりて。花とくちぬるするや云々

一山つと　集(シフ)日本記　土産(ツト)　暴(クハ)万俗にみやげと云なりや

一三月大日あまりの程　殖家右將左遷大宰府(サイフ)ニ云々安和二

三月大六日や

一三月のつゝちゝかきこの日

三月朔日にあるよ上巳(ジヤウシ)云々　世風記(セイフウキ)ニ云三月上巳桃花水下之時節

食為鯡續漢(ホンシヨクセン)志云禮儀志(ジヨノレイギ)ニ云。三月上巳ノ日。宮人置(オク)禊飲於東流水ノ

上巳(キリ)祓禊(ハライ)のこと。詩學大成(シガクタイセイ)にあり。三月桃花水下時に秋

蘭葉招魂續魄拂除不祥(フシヤウ)

一 山ぶしのひらきに　山伏。山伏とハ世俗をのがれて山林にすむ。沙門。出家を云ところ　一 やぶしらし　藪原

一 山人のおとさこの　文選潘安仁笙賦曰。棗下纂纂朱實離離。事文類聚曰。君江却老方見上。君曰。臣嘗遊海上見安期生。食臣棗大如瓜。今棗おとさこのハ棗の類字

一 山ぐちハさるがくれ　山口ハ山入のはじめを云也。保瑯造交のおるんとて十月に山口祭あれバこれも杣入のはじめ成べし

一 やまくさは紅葉にハ秋の義を　万葉第一ニ云。天皇詔内大臣藤原朝臣。競憐春山万花之艶秋山千葉之彩。時額田王以歌判之。哥　秋山の木葉をミてハ紅葉をバとりてそしのぶ　略之

一 やりハはくそとらずや　一 やくとハ文を前後よりよむ也

一やまとむしろ　紙屋のめあしよみ心也

一やはたの文とハまつりごとぞ紀　松浦翁讃ハ日私河妻翁讃

八八幡月衍．翁讃ハ翁前神功皇后ある也

一やまざくらともる物　柳ハ面白く．裏おもし．夜ハ卯花と云也

一やさしきことハあしねと花かされおもしろすなるもやさし
さらし云也

一やさしき　心やさしき心也

一やまとごと　和琴の名匂論也．されバ家にてハ只和國のことくとみるやまとそへていふなれ．和琴ハ絃六すぢある也

一やかずおほどをひて　大将鎧以下弓箭を負る也

一やさしうきべし　きうしきやく．ぐやさしれども云．事つまりうべし

一やおさまれ木のまれ　呉同．志かすまじき也．不穀のいろハ時

節にもちゆるにや。一答　下襲の色。時節によりて。桜梅八十一限あり。其用するや。其冬ハ柳と号す。夏ハ卯花と云。同物也

一 柳の紋をもちひおもてにすべき　史記曰。楚有養由基者。善射者也。去柳葉百歩而射之。百発而百中之。左右観者数千人皆曰善射。

一 山あゐにすりたる竹のかしら　繁茂條附紋。舞人竹文長摺袍。蒲萄染下襲。地摺襷。合[illegible]陪従。樸襴文長摺袍。柳色下襲。白綾襷。合大口。赤純半臂緒。別幣等。各用付之。此何のつぎぞ。東遊の装束なりや

一 柳をならべてつらねたらん　河陽柳を白き色にて毎に略ス

葉花をおなじきいろはよへきるに

一 陽成院の御紋　陽成院の御事ニ。或ハ云。文貞保親王と申ス

一うつれと枇蘭の式アつまるずしへうう統一家之

一哥 山里の哀をうつ　此詞巻の名大物の名まいう

一哥 山がつれ始つ紀を心宛あるうタ霧は多もじきと心あつをいう
やりのへいさどめじらや、常の心宛あるうと云いうきるべし

一やしもを結　進や、どひやら心や

一山ざわの心ら　山るい山のおをいぶそしぬつ物也

一やしまをば　やしまずれば也
と、挑景しのうや

一哥 山風まうすく　登を萱の吹のよ

一哥 山ざられ　まあしい庭鳥也

海おくの山の善さじをあふくらう、るまるせまるせしるし

一哥 山姫の　多かく深うつくぞ、むかしるんと云、大意の心いふれ
ともわうのごとし、意の中密まあひそめのひし、故ま、これまう川ら

ちんとれ心すや
ひかいへずそてありしてろ心や
不とかおもらずに一夜もあらしがるらんとれ心や。我(ワガ)生(セイ)のうきさとろす
と。寄生(ヤドリキニ)なよとへらりさりま

一 やづわるいは 藪(ヤブ)なずとし日の
一 哥 やらもしれま 昔やらかこさくろ
一 まや やられさて 家(ノ)渠(タミ)や

一 哥 やざるとま 前の冬の哥 せさひ出るし
一 やふりいは 戒(カイ)を破(ヤブル)ともいはれざるしと 其の詞なる
一 やるとかれ沢る 浮舟(ウキフネ)は秋の比宇治(ウヂ)へ渡りて 明(アク)年(トシ)の三月に
小野(ヲノ)にまうつり給へば 蛍(ホタル)は三路まじそし 流(ナガレ)て 又浮舟は薫(カホル)の給
し路の物は寄(イセ)は 宇治へさいく渡りのかすま。不審(フシン)あるよや
ま
一 まづしゆきさ 善道(ゼンダウ)に為(ツク)ずる詞や。広狭(ヒヤウタイ)まひらきれ心や

一まうけの君 儲君（チヨクン）ちよくとも云也

一まうのぼりをまかふ 参進（サンシン・ミウノボル） 日本記 参帰（サンキ・ミウノボル）とも云也

一まうではさせ給 纏頭（ミヤゲ）

一まさなきことゝす ぶさまさと同心也

一まうでちん まうづ・まうで・まう詣 参 まゐりつる心也

一まどゐる まどふ也

一又いゑをみてハ 帝門（ミカド） 更衣（カウイ）の局（ツボネ）

へだしきさせ給ふといへども ゆるさせ給もずらは

れいもまれなるも也

一まげくるす 曲（キヨク）するなるべし

一まくらことば まくらことばや・明誓此口ずさみのふ心也

一まめくち 実ぐちや

一まへ中将なども 源氏此時も

中将也・此袖㒵するハ送（ヲクル）しすとおもへる心までぞいへり

一まれまれハあるずちひさきめぐへ 萩壺文宮蜂（ホウセイ）などにて心をかけ給ませり

一まほ　まともむ・真帆(まほ)にといふすなほに真帆(まほ)と
いふ物よりいでたるや

一まんな　真名(マナ)也

一まぎれ　まやくの心也

一まうと　真人(マウト)おもてに云ゆへ

一まらうと　客人(キヤクジン)や

一まろ　我らを丸と云ふ人(ヒト)多し

一まくらかみ　枕上(ミクラガミ)や

一またくて　燈(トモシビ)のあぶらのかゞり(ナ)ひ
らめくえ・人の月にくらまぎるゝ

一まつりもうし　陰陽師(オンヤウジ)のするわざや

一まさに　あすらき秋　八月九月正長夜　白氏文集

一わすれぐさ　まじなひ・ちぎり　厭術(エンジユツカキ)か招くまじなひ代(カラ)や

一まちのわけ折なかれ　句ひやうする神や

一并　まことや茶の　身をむつとは深のかふのあるひしるすや。

さうきとハその有志実なすれバ是れをしき伝えん是れ心也

一まむ人まいふごうしむや

一まづてんでんふ 御膳おうま

てんでんふや

一松の壱のしおくり 貞松款

厳寒とて春雪もまた凋ざる松の性のあらしろうりゆや

一まんぞけいし 歳寒い地ほで万木凋をつくさらるやま

さきつきも有 敬身に入りて後のあるうすどまで浅つきだうや

一まむゆきうまいあらで 紫上い母なるさ衣装母やしなうひそ

あれバ三月の服を一廉心ぐして 除服の後を志げしくいなすまさ

の衣をきあふやまむゆきさとい紅梅もえき桜紫梅桜などぞ名

あるさぬを云べし

一まうげし まふがしたらく女れかふ

などゆうとおち入るなや

一まうかれ柱 条をいなそい菜茶

のまくらのうすや

一まくらをそばだてゝ　遺愛寺鐘欹枕聴　白楽天

一まゝ　まくらがみ　いはまくらはすつせ云也

一まくらにおちくる涙はまめぬべくぬれしたる人々の袖ひぢてまで

手枕てゑ夢はさめて涙の床に落とめてもあふよしもなや

一まくらさだめつらねて　定家卿ノ説まくらを数ふる瞬めぐらす

一まくらにかはるひがこと　其上

也摩杏那波　日本記

の髪の潤をそはれるを云也　一とこめ　ましら　褥　日本記

一まそゝや　まそてそげしや。大ま遊の約也

一まくしき瞬也

一まんをかくれくちもとき

両家技ニ云　瞻寄目。莫人起座唱万葉歌。皇延祚億

齢万葉元慶寿年光藤。催馬楽浅海三船揺。今案万葉ハ多氏相伝

すべて八句の詞や。それと漢音よみにてかなよみわかちよみ有之
手紙さなりや。指寄れ諸人のかき様よりすなりを。添
氏の名の口ずさひよのものや。むかしく二句をくさつけ候り給

一文もいのて　一通ハ雲井の居。一通ハ五節言丸

一まんなれすところほどよ給まんなれすところとへよすく
して草の書しる紙云。それハ私もこ家なり。なる紙にやうよ書
すざさば。ぶざけなさ文字すぐよちなべき心や

一まぐりぬさうし　寒抱とも草の子こ云や。門か典の書する。巻

一第一。第二ちどし云外題あると。寒抱く先本まておかや

一まのさねるべし　内控や的射弓おるや

一まつりの心うけるよ　計と網受え格くどれ家のよれ心や

一ありかくさ桃葉とさら　神仙家有千歳亭一と詞や

一ありとつらく　淳氏ほれ恩宗ぼうんらしめ人ハ松柳の守護しあるめ人ぺえらうさ給ぞぺ常上ま寄給ごや

一あうびうさる代　仁和るの年号ハ大日也　摩訶毘盧遮那とハ大日をいふや

一あうしつくさえし　行人の眼ざしれおそろしさ雨といへらぺ附ありしハ目やぺくさえくともりくしさちどやうの心えミミ

一松ヶ浦と出　松の木ま有る名所也

一松浦のあまれ　夜のあかしハ忘れけて月ま雨とりうますといへり。されバそて今宵ぬさうふべき名をバいそくてのふべきとや

一ありと夜ヶ河声　映々残灯背壁影。蕭々暗雨打窓声　白氏文集

一松の葉をすきて　仙人王莽食松葉不飢寿一百七十余年
すくハ。のこのみ也
あさき心也

一まつくすきまもれ　全ゆゑん
一まうでゝ　ふるれとふ也

まげしそ　心りしちくやくくすまし也
一まくらぶかき　筆花枝ま。山さらぐれを遣営して抑づちを投る
られなから。叔從和君来ち布利　一まくらかられ　からぬハかれぬ也
叔從まそへるも待こまつらん。松まそへるり
一まろくそえつくされ　権仙家をまて　昔の人わつ苦の中ゞ家の来
あれハ一千家れおちこゝ也
一まろゝる　園頂　法帥也
一まめ人　忠人也
一まめくしさ　まめゝ敷也
一まがく　後　狂言方
一まうらさんとち　大真也

一まさぐり　まさぐりとてあそぶ心也

け

一げらうの更衣　一撿非違使の三四位のむすめなるべし　更衣（カウイ）

と三位よりけちかくてけうまとりてハ桐壺（キリツボ）の更衣ハ中臈也

一けふちうもんべきいのりとも　更衣の皇子てのうちといふ

一けちえて　絶えはてるや。光るごとくそもさやと心也

一けうあるけうる　興あるべし

一けしきばむ　ざれごとも云。上の詞につきて心にさとかりや

一けはひ　気日来記（ケハヒ）　形勢（ケハヒ）

一けぢめ　河　結目（ケヂメ）　掲目（ケヂメ）

一けまうハあらぬ　けすしくハあらぬや　河　不下指一不足

一けちかき　気近（ケヂカキ）

一げらう　下臈（ケラフ）也

一けうそく　瞬息（シユンソク）や

一けさう　懸想（ケサウ）や

一けうとき　気疎（ケウトキ）　気味（キヤウキ）

一けとしれぬ　気色さうしや

一けしきある風しら　さくらぬるとや　しこゝろえさうしび　さうしとや

源氏の雨夜（アマヨ）とげにひつむとが　ひとつまめさくろ心也

一げんぢのおこるひも　験（ゲン）方（カタ）や　瓢（ヒツラヒ）なるもぢんのあつと云日

一けふまでぬる　襟（ヱリ）どもの　まえいづれぞつくるやうや

一けづりぐしちぎる　わくるゝもしぬつと云也

一けざやか　清（サヤカ）方

一けちさす　暮（ユ）のくれや

一けいめい　おどろきさわぐ心也

一けおそろし　気おそろし也

一けうしひと　いさけよそちめり

一源氏のおほやけごと　此源氏

親王を臣下ニ源氏ノ姓をたまふ也。光源氏ニ

一げんぞく　還俗の事也　一けんなど　孫生

めし　げうさくすべき　花をさくすべきなどいふがごとし。一六催馬楽

ら心也　一けふハ六日ハ六日なといふ　長神

物忌也。長神方違ハ六日六日續する也。又一説何にても物忌

がゞさゝることに必るべし。天子の御物忌りあるところ日也

一けちえんするけ　揭焉　あしきる火氣也

一けうさうし　源氏よりいさやうとんとれ心也

一けいあう説のあしきりて　翰林の人出説する也。韻の字を

切韻として何字をもちて韻とするといふも又説の中にある韻

とって説の文字の中。平声の字を取て。韻とするもあり

又何韻にても作者(サクシヤ)の心まかせにする時もあるべし

一源氏のうちつゞき后に　夜臺(ヨギツギ)の中或の後。歌ハ夜乃女ハ中夜。

源氏の姓(セイ)を給りしかれども。帝主親王(テイワウシン)の兒女をハ。皆源氏にするや。三十

心ハ夜氏(ヨギウジ)の中絶(チウゼツ)するにも

一けさうしやうに　化粧(ケシヤウ)力をよ

くつろぎや

一けしやう詞　けしやうやうすき兒

潔訣(ケツカイ)兒

一けそう　乳池(ケチ)たれぐまし(く)。

らぞろくおもふる思ひ。けんぞうきるに

一げぞん　家損(ケゾン)家のそつとか

とけむ心や

一けうぞん　孝(ケウ)せんや

一けりんはうと　花文綾(ケモンリヤウ)ハ。有二花文一綾(ハナノモンアヤ)也。謝恵連(シヤケイレン)詩ニ云。客従二遠(カクヨリエン)一

のとき　万葉遺(キタル)二我(ワレ)二端綺文綾(クワツモン)ト云月心や。或説(セツ)二顯文綾(カンモンレウ)也。ぐんむさやちなど

ちんがとし。是ハ夜の出辰(シン)を云。或時ハ穀(コク)の望文(モンモン)をまちあるや。太略(リヤク)月

きんハ此の頃とハ時代菜代家と云。夜の無良莪闇に深る敷也

夜のうちに
一けやなうもつらゆきつれ　芦垣の斎八男の女と交ちかひて家を

年二
垣を越て為を女の如やまづつ人の云けるとなどこあそびつげつきん

とうさぐるを弁ず将らひの心也。それとけやなしらば八人るや。さいち

けうハ家のとと云詞也。弁へまけうハ家のとと、みとぢの妙音しあくるや。

爰ハ物語古く句を引て性まぬて詠ける多し。是も云引ろき

ふあべし。けやけうぢ家とらしうまさちぞ云心也

美下
一源氏のうちつきを　菜花物語源氏の打つきをに。をかしき

も昔日の詩の用とめるとも

一けうさ　燈蛾らさげ云心也　一けうしの分さう　瞻土菩薩脇

よ立旨説ニ菩勢のすや　一けまおしうきうし引く

夕霧の前の詞に世中ともげにおぼしたゆめつしもあらじと
云也。アクきざめぬて我のこやうき世をそむかなと語るや

一源中納言　薫中納言のこし。竹河のまにも世文推本にも。中納言
に成ぬとかけるも。薫大将の時成べし。紅梅竹川椎本同じ時なる
をくさとるや。此內君まつてされ混乱すべからず。薫の子孫なし此
の巻の三ことをごろかりになすかぬといふ系にも夢語も。目案のみ其の二鬱

一けんぞし語　碁の勝負や　畔見州の心や。又硯説や　けそうしと云
云る家もあるもげんそうとある系もあるも。おもかげすまや

一けうし　孝養や

一けしやくうし　謹摩に茶子やくるまあるそしのくもは

一けうのくるし　系ある

一けるるひ　織や

一けさう　化生

一けうやく 恔易 地すへこうをとゐうそめげよ地を分つをゐ

ふ

一ふくそうじめ 皇子七歳よそいづれも勝まさそれ詮者経序

とりふめ字をあそびしそむうや 孝経或ハ泉観政要

とることそうじそん孫や七歳の例多し

一ふらうし孫 舞踏牛の舞足踏るなと

一ふちつぶ 芝香舎や

一ふさしも らん氣もゑ乙ぬや

一二のみちうるふ 貧福の二道や 富貴女易嫁早軽其夫

貧家女難嫁晩孝於姑文集

一ふきしすろ 俗よいふ七月

一ふきひやう 風病や又腹痛也

一ふい 不意や

一ふつゝるう いうけ竹ハうゝるゝ

ふう人ふこゝ也

一ふよう　不用也

一ふるあをのこゝちさ　紅花青花とてまぜたる也。二藍と云二

つきとまむ。ふるさあをくとも。かくへといふ同事也

一ふびんなる　びんなると同し。不便也

一ふくろう　梟 説文云食父母不孝鳥也

一ふかくしくらうして　河説 ふかしくはこらてかねの文かくろ

ふか服不用

一ふせご　臥籠也

一ふちそくわざとくいふ心也

一二間のさいかさまは持仏堂也。

本尊安置する事也

一ふげんぼさつのめうち地　普賢

菩薩乗大白象鼻如紅蓮華色観普賢経

一ふるされくさぬ　てんといふ獣の皮をつくろふこと也。昔木

まれに見する地といへり。貂裘（テウキウ）ハてんといふ獣名也。如鼠（ネズミノ）といへり
拾遺（ジフイ）云。かうふそのさきざきぬを。高光（タカミツ）少将入道横川にすミ侍けるに。
中宮安子（アンシ）遣しける事。右別紙

一ふでのすさひとうたゝせ。おほぢもじ紀のあきとや

一笛のこんふところかうずる　花詩（シ）を披講（ヒカウ）する時に。座中に立て文臺（ブンダイ）とり
こそ小蕃まゐて。文人（ブンジン）どもハ階下（キザハシノモト）にすゝみて。講頌（カウセウ）するや

一夜のえんしぬふ花おほやけざまあづまずして。太政大臣の亭に
て。菅丞相（ノツエシ）宴ありける。又天暦（リヤク）三年四月十二日。飛香舎（ヒキヤウシヤ）にて藤花宴あるに。和琴（ワゴン）
管絃（クワンゲン）あり

一ふさりしかず　不祥（フシヤウ）なるべし
ゝゝさうゝ海也

一ふうき枕ふうを紀やすめ　長恨
哥。唐琴（タウキン）多聞（タブン）毘翠（ヒスイ）衾寒（キンカン）ゝ誰と共にか　白氏文集第十二　唐琴引

勘処旧枕故衾誰与共云々とも叶ニ源氏心ニや　永正七六記之

一ふぢやうちうつう不定也　一文王の子武王のおとうと

史記・魯世家周公自称何によりて・成王のをぢなりけんとすれん

とくけりハ父子ヘハ周公の王位のつゐての如くならハ・武王の後ハ成王の位

に付給へうがらに此由緒をおもずくていはく。朱雀院の脱屣あらバ・

今上の位に付給べきにあらずや。朱雀院の次に冷泉院也

此位に付給へバ相違するやうなるによりて成王の伯父の給ハんする

んと父今上の御心とかくさきと云へる心や。我文王ノ子武王ノ弟

成王ノ叔父也。於天下亦不賤矣

一文集　白楽天の詩賦とあつめつるや七十二巻あり。長慶集

ごろも云

一色合ふんのつうさ　云々　勅召書司云々

禄唯作云御手奈良ニ万為礼書司則取楊女名如琴置之而薦云

今東物合の後ニ必竹遊あり書司ハ女官の名也和琴をつかさど

るなり和琴とも□て文のつきに云也くわしめハ宇多の法しよ

つひきぬ和琴や

一 ふかさしまさしまれ　琴をもさ

　　　　　　　　　　　呼 松風

□にいろ□宮の名にて琴をうけかべきに誰もよく□く人ある

どとよ□まへか

一 ふけんりう　普賢講礼

一 仏天めでけ　あそしく琴しうるや

一 ふくつけれと　大□や□□や　呼かと入ろうる海や

一 ふえの音をもかうことハ　向子朔思舊賦序曰隣人有吹笛者發

声寥亮追想曩昔遊讌之好　文選

一 ふかんも　大路　氣□國ゟのまれと□さ名□□

一ふくさんくろ 肉のすゞしいさくら地のさやめぬかのきとや

一ふぢのかそちが 女の装束もしいらぬにや

一ふれぐひ 鰯や鰯もしりべきすされ也

一ふく川ゝさ むさかろ也や 一ふくろうはひまて 王ハ大家の孫や源の子まても葵のこのもろ子や いづれをもさるれぬとのあくち

一ふんせいされも家礼といわす 内大臣の歌ハおやうくちもうしに夕霧の家礼のうしろもうしまさぬと恨給ひ 家礼と云ハ子れ父をうやまうるやし 他人なれども准して礼をいたすなり 今の世にも家礼と云や あるじにれをしへ 儒者のをしへなどを云や

一ふせるとし 出陣やけさ脇 親王大臣以下布袍を内裏にまくらしず給や 灌仏の布施にハ昔ハ銭を用ゆるを 中比より紙に致くるや

一ふるき紫にて君をうへ　あさ紀文わく八浅黄(アサギ)六位袍(ハウ)にそへんへを

一若之萩衣のものなどやつれ結　服衣(ブクエ)なとしきぬなとや

一うちれそのまゝ奥入(オクイリ)し門哥(ニキウタ)を不用(スモチヰ)ず哥ノ体(テイホンソウ)になりてはる所縁(フク)分(ブレ)の指(タチ)あるき心をすてまうべしとなん

一あさいはきものゝなどは　譜(フ)や河海の琴の譜(フ)のる程(ほど)くにて略(アリ)して

一かんじなりて　物気(モクケ)を封(フウ)し　琵琶(コト)やなに行(キ)にて椿(トウギ)者のけしや

一柏木ありくるう　女三尼(アマ)に成ても　回(フリ)ぐるしき歌や

一あさきといふさんには　源氏のあすすとも　女三宮(ニョサンノミヤ)のあすかが出家(シュッケ)止とや

一ふりめさき心　古風(コフウ)なる心にてならぬとや

一哥ふるき枝のあはれ　琵琶のねにゝる羽に更(サラ)に舟をたてかさねとや

一哥あそ竹にかさくる　柏木(カシハギ)夢中(ユメノウチ)にうてし風をさせ息(イキ)にてする

一 わきまへハや。ことなるべしとハ雅也音律(インリツ)ハ皆声(ミナコエ)の調子(テウシ)によりて吹(フキ)

つるものや。まぎらし　一 二三日(タミカ) かくてとかるべし

一 ふせんれう 浮線綾(フセンレウ) 唐綾(カラアヤ)や

一 ふすま 粉(フ)麩(スク)穀(コク)をよく交(シキ)まじへて粉(コ)にして餅(モチ)にするなり

てゆでゝ葛(クヅ)とうけてこ○まりて。ほそき竹(タケ)のつとして其

中へくるとゆゑてむぐりとをきてつき出してぢを双六(スゴロク)の調度(テウド)也

ごとくまるゝやうつかの物紙によくにて

一 文そてもつりのは 先夜(サキノヨ)訪(タイヲ)ねて翌朝(ヨクテウ)に詩(シ)とはなしまへり

一 ふうこぶれ 半夏(ナカゲ)とハ句(ニホフ)と芸(カホル)との中せいうざとらふ味ふべ

し。身(ミ)のつゞくつも不付(スツカ)ぬ心也

一 ふうう 武勇(フヨウ)。不道(フタウ)とをなるき　一 うろ川の 浮海(ウキフチ)の心ハ志ゝ○代

我むすめ婿ござなるや

一 こさいのこと 夫妻也

二

一 こゝあつ時 いつもしくたきちるとするある時也

一 こなたかなた 此方彼方也

れば常に御旨よらうさ也

一 こゝろばせ 心操

きもれつかるゝ心也

べにあるもの色あひし人のよ也

一 ことぐさ 言種

一 こりうさん 花鯽負令の玄蕃とハ訓ま法師まらうとの

一 ふところぐし たうぐしと同し

一 ふかう 不孝

一 後涼殿 此殿の西にある殿

一 こゝろばへ 心栄

一 こゝろきゝしいらやうり

一 故大納言 扨て故右大臣故

一 こまうど 高麗人のよ也

つきとしあり。云ハ謗蕃(ソウバン)ハ客(カク)や謗居(ソウニ)と云ともいへり百済国(ハクサイコク)
より来朝(ライテウ)もしゆくる。蕃客(バンカク)とおもしく此寮(ノリヤウ)にいくところ也
又鴻臚(コウロ)ハ腹(ハラ)の前(ニハ)を曰臚(ロ)。鴻(コウ)のなしときこゑをいづる也故ニ
鴻臚(コウロ)ハ声(コヘ)を傳(ツタフ)ると云心也異國(イコク)人来朝(ライテウ)の時ハ通事(ツウジ)といふ役
さあつて西宮(リヤウゴク)の心ざしをつくるゆくや。七条朱雀(ニヨナク)にあるし也或
谷此四づりと云事此色りとや　一こうろう　至誠ほめろ詞也
一こうさうゐん　穀倉院(コクサウヰン)。おさめ所(トコ)のうすや
一心あて　とくろうや　一こうち　まうちぶちかいふハまう
まことや。ひとりごちも独言(ヒトリゴト)云や　一ここそり　云撰(コトエリ)や
一ここら中よ　許あるまれ中也。又熊掌(ツウ)あどいふ心也　花こと
あう雅あろ中まや　一こめきて　巨字(コノヱ)也大やうろ

称也

一心づよき　ちよく　心よくつよき也

一こゝろがはり　とゝろ〳〵かはしいくらかはる心也

一こゝろぐら　復楚（ゴダテ）卸（コタヘ）白氏　女の熱名也

一こと人のいゝんやうは　いろうみとなしぬ人のいゝんやうう

とぞねのの源氏の君をいひおもふとぞらる

一心ぞうひ　心づらひやおそそ古法（コハウ）也

一こや　これやといふ心也　　一ことゝもなく　かめうちつ詞也

一こゝろのねも　祇　并　つれなき人をばえやハ引とゞめおくべき哥かし

おもわれば庭の紅葉（モミヂ）をも見てこえやしまれどいふ心なれ

ハわらはまちの義也　　一こゝろぼれすて　詩の事也詩は

も哥のごとくう　ぬれま　　一ごゝろちのぢやくうわち

八夜の暑氣也 草菓ハひろと云物也 暑氣とさる物也

一 九日のえん 重陽宴にハ天皇南殿に出御ありて内弁外弁等ある文人博士をめして題をたまはしめて各韻のまゝにさぐり韻詩を作て講ずるなりあつる

一 二條のとの 中納言にて大臣つとめける人也

一 こゝにおくるれば ことごとくおほく明り也

一 ごらうせ給ふ 博物志云 尭造圍碁

一 こうきのあやのひらく 女房の装束以月以日よりハすゞし 読つ
ひわたもくきわそひらく こうとふへり こうきあやハうちきたるへし
花 こうきむらさきに紫こうといへり

一 これまでも そのゆかりこれ也

一うしろたき抱まはしろ心や。うしろかみひかるる扇や

一そての哀れ　九品(クホン)上品上生(ジヤウ)のうちや

一心あてなは　花夕がほハ女の明かりにて見つる家の光ハ源氏

まよひて寄るべし　　一これみつがおもひ　夕顔の宿(やど)

一ゝ惟光(コレミツ)がめしうど候ひける人をおもひざるや

一こどもあまた　小舎人童(コドネリワラハ)　中将女将どもしつれや

一ごかんじゆくらすのさま(コト)や　　一ごとく　如(ゴトク)や　おもしろしおもし

ふくや　　一心さうらう　ぞうしハえん字也し

そそろあはれ見るや。ぞうしき心のうちせえへいがは此心や

一うちへし　河　お情き心や。琴(コトノ)かや。よしくしきや

一うらんえいしとし心や　慰(ナクサムルコロ)心や

一いゑもそぬ念仏　葬送(サウソウ)以前(イセン)無言(ムゴン)念仏(ネンブツ)、得十五功徳(クドク)と云々　河にあり

一このきぬたうきしと鳩(いへばと)や　かゝらじとまくべからず。なまうしの院

そでも鳩のちさきうり奴べし　一このほどまでは　くだりよまる紙。

中陰(チウイン)四十九日までは、中有(チウウ)にまよひきるまうぞとや

一この家のあるじぞ　揚名介(ヤウメイスケ)書(ツイ)は、よし此家ぬめわらい婿(ムコ)や。三人の内

嫡女(チヤクジヨ)兄、一人はつうしよ　行(ギヤウ)女、一人はのかうおい大臣(うえん)は剣(づち)の夕がかのぬれど

が婿や　一小柴垣(コシバガキ)あれど　柴垣(シバガキ)のやさしく

之(え)ゆうき御や　一近衛(えゑ)の中将をすてゝ　此明石に

入る前太政大臣家の時、近衛中将まで叙されぬされど捨(ステ)て播磨(ハリマ)

のちか権守(ゴンゴ)をかはらせしゝろや　一ごもん　権守(ゴンカミ)かおろ新発(シントウ)也

一こなしちからのちらい　僧都(ソウヅ)禁足(キンソク)の籠(チカヒ)三年山ごもりとるや

一らんかうしのすゝ　金剛子念珠らうさうまへ元興寺賽賦
悵笛九まてさうさ　一らんあられつぶ　餌猫碍窯部
馬と貴布祢の中に、鶯宿が谷と云まで、薬師仏不動尊霊験の
地也、薬師仏の壺也、鶯籠の送物になる也
一ことば皆もろ人まで　拙よくいふ紙云也
一心よくわるとめべられば、女房めん衆の上いふをみてはとや
一ろくもりてとも　葵上六条御息所の事也
一こと人のいぶんやうに　命婦ハ源氏のめのとこちれバ、あやまることぶ
あいもかそとの経也
一心だにもすぐさる　心だをさし
すきくろうこや
一此前　天子ようぶわてごきんと
まゐべしかるまおまへどうさうわらしごきんとしまべし

一こしう巨(コ)くや。ひはやうこうされたる心や

一心ゆかぬあくさすぬるすと云。心ゆくハあぐさむ心や

一こしのうちも中宮の行啓(ギヤウケイ)にハ。鳳輦(ホウレン)にめさるゝすまゝ。又庇(ヒサシ)のいとげの車に乗(ノリ)る時もあるや。供奉(グブ)人の行粧(ギヤウサウ)も。紫抱りようてクリウスするや。伊勢物語二条ノ后の民部ゐうでを引也

一後宴(ごのえん)のす　弓の結(ケツ)をたて太にてある。後宴(ゴエン)あといふ名目也。男踏歌(ヲトコドウカ)の後二三月に弓の結(ケツ)あるすといへり。それを後宴にな
ありけるや　一ここまろとうすめるはと　こと
むらさきの雲をかきそて月をいぐしさるうまや

一ぱれもへまつそハげるをかくさせ給ふめ　二条の都とぞ忠仁公(チウジンコウ)にあすゝへて。かげなきそうくさせ給ふもあさ。源氏の給へる也。伊勢物語

さく花は下つくつくりごといへる所に似たるにや

一　あふひ
ことつけて　かうつけてや　一祇園の日　祇ちやうへの日也。今葉葉
葵の斎院卜定ありて後、禁河のみぞにてけそぎされるおもて
すゝむ初斎院へ入給ふ。初斎院とハ、大内の中、大膳職或左近府などを
点じてこれにて三年潔斎のうち其年の四月に祇社へ参給
ひらて祭のおこる吉日を撰て又祇ちやうのすゝむ則紫野院に入給ふに
入給ふこれを二度の祇といふ。さて中の酉の日祭に社へ参給て
に還給ふや毎年の御祇いふ年日これを終するや　下略之

一　いさきあをまびの　花田にあふひのまつれりなや

一　こゝろつくわがそうんやうちゐて　三秋未晩之候五夜将
明之天別緒依々之情由声切々之恨遭逢斯時いとゝまさるなりつ

くりてさんやうや
一ぬごんのさずかう　護摩五

壇御修法　降三世　軍荼利　金剛夜叉　中央不動　大威徳

一ぬくさんの日　法華經や
一こまとも　粕散丸細浮丸細分

おどいへるさぐひや。對座まぬきとまて蒙や

一こうのべて　花　蟄居をうへの月久へいあてく侭ごと乃

もとこいふや
一こころしまて　無為日本記ことに

おもひも同心や
一うりずゆ　うりぬるまを云や

一心らしごと世　花　どこよハ仙境をいへり。春秋のうつりもなき絶ることなき

て常世といへり。唐ハ本國の世をのがれたる所を住居なれバうくよのこと

なるりまる
一心おうそひくてれ　孤兄の心り

琴はひきとじめられバしすま絶るることまでさぶさいあつまりじきこと

一胡のくすしをしらずんば女の哥の心也

昔王昭君ハ胡国の王ニ嫁をしるすハ行まもまずあればあるくらしくまらうすをよそすこてまハ我か人などもやられ遠国へやるもくしばいくびらせれするをゝ也いんとつれぐのおもかまづもあるきるすあれと哀まむあふくらぐのあつまつけて昔れるすを也ひあすらへの心也

一このまくよひのあ如ル也うし道満法師落宿播磨国ニ沈すれ

一あしくらうじ　細字也　くるびれら心也

一こまれくろこ文のくゝ　高麗紙也

一この海なをし　末玉も御神也されいくちをおくりしと書也

一こどよろ　何をまくいひあす也

一こまの侍従が母やどころさ抱のあれら絵ばかりと名付や

一心だに　天暦三年菊花宴膳打敷心葉菊花云る近代の装束の物

打敷の四角まはりを金にて松の枝をゑ糸にて葉をむすびさゐ鶴

ちどり作てつくる也是心葉の事也今ハ糫の箱のふたにも金に

て菊を作てつくるとを云べし　掛造の方をも心だにと云る

一このせのちぎりの竹の中よりやうかり竹の中よりおひ出ければいや

しかんとや

一こよせのおもつに　呼私動　除目成文

掛讃岐守目録八位下臣[illegible]朝臣相見　壹師　昌泰二年二月除目執筆

牛平行時平公

一れいまろくちまけさへこめん

きよ上の[illegible]てとや　天徳哥合を模るを古来物合勝負帳

例也　亭子院親王歌合の事後撰ニ亭子院親王歌合しけるに

その弟子によりてゐけり哥ありと略す

一 この時にあらむとする其の人いひつたふべき世にしもしらには延喜天暦の聖代と云ふなるべし冷泉院とい天暦の御子にますなれば給ふなるべし

一 松風 これ嵯峨の内の大臣のつくらせ給ふ堂 荻島棲霞観にも比し

てありし棲霞観ハ融公山荘後によるになりて清涼寺の東に阿弥陀院

堂也法橋上人奝然より清涼寺釈迦堂建立と云ゝ

一 こゝもとのとゞろかし 小鳥付枝のこと 数丸を羽の下にはさみて山

菅藻ハ汝にきらうてなき也 荻によりそへず萩薄菊の枝にても

付やきるしゞらをば鵜のねんごろのをきてと云 執ぬべし

一 近衛づかさの名ある物の 今案物節と云ハ近衛

の舎人の中に東遊に達したる物節と補せらるゝ中に番長府

事などをまずるや。是によりて春日祭・賀茂祭の使の羽林家庭

のと衆十人めしぐするに。拍節の近衛・求子(モトメコ)駿河舞などいふ事

をつとむるや。陪従(ベイジウ)とは府生(フシヤウ)中。或ある物を用ゐる陪従もあり

近衛の官人や。陪従は和琴(ワゴン)笛(フエ)など吹拍子を云也。略して

一 これやまうくしぬ人 やかるとうくしぬへや

一 故大納言いまひとたびと 大鏡(オホカヾミ)云。三条院の御時に。后(キサキ)にたゝせん

とおぼしけるが。門にハ大納言の娘の后に立(タツ)例(レイ)なかりければ。此文

大納言なる贈(ゾウ)太政大臣になして。さてこそハ后に立て給ひしかと

一 子孫さかえさとのすも 史記 明君(メイクン)知臣(シリ)明(ヲ)父(フ)知子(コヲ)

一 世継をそまもる経 源のまいしもろ世継に惟光(コレミツ)が付

め系なるや。歟 同云源氏君ハ公のかなや。一勘可尋むすめなど。

捨らるゝ人なりけり作られたる。文覚上人ハ。国司ならるゝ人や。是ぞや

喪の袋とあづくや　一こあけぞ　夜あけうちとし

やさ細のさまや　一そこをあらためさんのそらわ抱

河をせんハ面をそうぶうにあし。おくら葉ハよれて口八枝葉の赤

を方なれわかるやぶつハ上ニ着。おくなめハそぬる喉りなるや

一心ら去るまふそれ心ら去るハ心をとめ給ん。紅葉のたもとろぞ

ませ申されんぞよとや　一こらぞとぞくろう　抱いひの

なすまうを云や　一この月ハさむるてなす　三九ハ

去季の終也。四季の終月。世俗ニ言云せいよや

一胡地のせいしをがむなしくすてゝつ　一本　湖の地　梁原つ井ぶ路

見二白氏文集　胡地妻子虚棄捐。指後漢ニ攻胡之時。漢ノ人止胡国ニ不遊

一 帰漢軍敗之故也後又従漢攻胡之時此胡之人欲復漢也以背棄胡妻子而漢不入彼人剝園之号獻出伍人也仍両国無疑之意叶物語喩云ゝ

なゝ諸旨まゝ法師はまれわく叶を云や

大方此人は牟をもじ此心也

いるゝ筋とは武かゝのいなまる君とかへかんとや実父ゝ心ざしそめ

あさんのやすらひや

紅梅のもんらきゐかいらもらざいまやうあはきねのそめるも

一、えゝ ここがさもん　寿詞 日本記　祝言也

一 こゝ恋ものゝ出くる　引哥未勘

一 ごしとて　又法師のつ

一 こまくる　若菜 万葉 若て二夜

一 これ戸ぐらかるべき人へ心とた

一 ろひはくゝ君は 悌 方さは深此身也

一 こうもいのいといらくもんう紀云

一 ここくもうかりとをふくろまそて

管絃の嗚皆感に納奉ぎや　一こゝろの山にまよひけれられ
孔今案孔子のくられと云すハ昔から世にとくさまに云つたへられ孔子
ほどの聖人あれどもはやしてうたふるみえこゝとくどもや文君
にそよもうす　一こゝろ思ふち　是ハ忌ならじよむべ
しいられもなんそちどよむや　一こまのゆくゑ　枕草子にも物
此の名に出たり　一このミあふめ　好ミおふめや
一ことついたひう　空まつさあと云執やことつき答べしことり
ひいとまるくなる本まで花鳥三説おけ丸人かきひう仰とも心
ねずうつくしきすれ　一こゝましらば　引導来勤
一のまさこうちさひさおとし　りけるを引おとし巻や
一流おれつづもんざいのえん　春焼なりし中ねの下がさねりとや

一 こしゆへはきさて腰(コシ)をれゆかしや

一 こらうのまけ 古老(コラウ)のすけや典侍(ナイシ)や二人またさる人も内侍のつぎ 典侍之

一 こうばいのかさねのうへはそなり 梅のこと 紅梅の唐織(カラオリ)物のはそなる也 女乃

さうそくはまくらにそめなどや

一 ことしもれさうそく ことし稔(ホウ)栄(エイ)

どいさ絃(ゲン)け拉(ラ)つけなどや

一 心あらて風のうぐ 風ざよ心あ 哥

淋よ堂おそ哭ちくすべからしや是も落梅(ラクバイ)の曲(キヨク)の心也

一 こまれくされるごとまや〳〵まちなぞらう 絃たぶうらく〳〵なぞや

一 楊(ヤウ)柔寺 深(フカ)草(クサ)に在(アリ)て 昭(セウ)宣(セン)公(コウ)

くるみや

一 心やまことに月(ツキ)がけ 待(マチ)ぞろかや

れ御(ゴ)建(コン)立(リウ)也

一 近(コン)衛(ヱ)つかされ使 斎(サイ)院(イン)ノ祭春日ノ祭の使近衛司(ツカサ)を見るくは東遊

とまらうしねや

一 このみ秋の行幸 呼(ヨ)ふ八(ハ)ル去(キヨ)年(ネン)秋さらま。

夏ハ暑に扇し冬ハ秋に扇を捨義ある也芭ハ萩のうへの十月也

一小松ひきまれよろこひ　末広きよろこひまひかれて深も年まう祝ん也

一こまれ　菰枕　献枕　毎菓也よそ枝ハ四手枝也

一こまもれらんしやう　これハ高麗楽也乱声落蹲舞これそこまの舞す

也左の舞ハ唐右の舞ハ高麗楽也

一まひをする人のうち　女三の形にとておもしせバ何とそねかうくとあ

一これまたひきつるもしれ　光葉天皇文武天皇と

弾琴語云　呼うきのれとしけるおもすこ云こ

一こくれしうん　これハぬのえへあるすといへつ河一字は挙手二字

ハ降語三字ハ水宮銚四字ハ蒼海波五字ハ雁鳴詞是也

一文六もしのふ　今の世ハ無楽内といへとも万歳楽文六治あるまじき

破（ハ）は久しく敗るゝに。又六の破るゝと云也。又六の破六指の破（ハ）と云心也 云々

一 こゝろし卅七にぞなるか給 家にしれや事也。若（ワカ）く家に深夜に七（ナナツ）ど
されはもうきゝ両。心寒にて八十年をとゝりとみてとゝる

一 心ゆるびなし 油断（ユダン）なるをゆるがしき心とや

一 心ぬるぬるしくなる人ハ 孝経云 小（スコシキ）敢乎少得福大敢乎大得福
孝経至徳要道篇

一 又久いざくわ 殺生（セツシヤウ）偸盗（チウトウ）邪婬（ジヤイン）妄（マウ）
語（ゴ） 飲酒（オンジユ）

一 又十ちのれ誦経（ズキヤウ） 又千のれ誐（ガ）
なれバめでたき事にハ事なきや。

一 こゝれきゝの窓に 書れ下にまかせ
さへこるも父の為にきこるべき服衣（ブクエ）とて孔為にまかせこゝ
の弟へか霞（カスミ）の衣とハ服衣也

一 ごとるゝバなるし 此枝 ござるゝハ
めでたき事なるしの枝とハなかれ枝になかれん事也。紫（ハ）佳（モリ）れ袂とハ袖（カタ）

事そしてみえず

一これはこれもこま皇侍らん。落葉

家の作琴なるも。指はのまづひはのらんこれ也

一琴れと為しらし後　指本これをそ落葉家琴も引給は

ぬられ也や。昔伯牙鐘子期とて二人なるものて琴を引し人あるを。

鐘子期死て後は。伯牙いかやう今より後弑琴を知者をもなき故

なひくじとてやきましきや。それを伯牙絃を絶とはみえず

一声よつとり事楽俘樻のかうるし。多勇と指本の和音と云

一これはこゝろをすべらやとて　落葉ハ忠史忠を引すべらるゝと也

勇代そぞのし給とや

一これはちん後らこれかたれことを

代ゝ指本までもち伝る名物の筆とや

一ことハあゝるある月の文。三五夜中新月色。二千里外故人心

目中七十六

一ことさら以人ハ こゝろ所ろ称也

一こうもやり業障(ゴウシヤウ)

一こゝにあらはれて 雲ゐと夕霧と見れ中さゝのあらその心後のうきや

一ひ名こそ(幻) あふ日と云ふなや

一これよれに日ひ(白文) 天人の心九どの

うき香(ニホフ)や 三千十二ね(サカ)ハ吹二の色(ケシキ)完ちる出(ニホヒ)や 大経宗(ソウ)網 香弥よ

生るゝ時一室(シツ)薫じたや 聖(シヤウ)徳太子も同

一心のさしみや さひゑし心也(紅梅)　一このまん(竹川)　おま人そて手合九

一こゝさらく(そゝひめ)　極楽(ごくらく)の哥舞(ぶ)の菩薩(ボサツ)のうた

一これも月をさるる 琵琶(ビハ)に撥(バチ)をさしおる事を隠月と云 面白詞也(源氏早蕨六)

李嶠(リキヤウカ)琵琶ノ詩ニ云 半(ハン)月分弦(ツル)上ニ　一哥(あけまき)　ひとびてさめるらすら 試愁

ちひてさるんと云 雪の山に法とけらい死(シ)んとて ふったゞひこゝまき

ご我心をもあての結や 雪の山にハ菜の名を(久リ)さめる菜れゆしきこと

とりふさや

一心ごゝろなき　童子ハ求法ノ意ハ悪

わするれば心ごゝろなきや

一この恋ハ　哥さりとひ　くらミハ錦をきへるを

一これ茶一枝ゆかず　寺内園中花難類猶君許折二一枝春一　朗詠

一これとそし　好殺よれつなるゝずと云心也。これとそしハ好色して也

一こゝろひつ　小唐櫃

一こゝれひろ　引膠一襟も分

こゝは古めて其。襟の恩はある物也。恩はあらハてんねん也。ちくらゝ若

名をえ付ゝる心代合也

一こゝりともり　毛延寿。王昭君

と盃舞ハ着。眠君貪ぬこそまつしめ合まゐもせそゝくも逸もなき

ちゝしゐるや。ひすといへ

一こゝろに　蘿鄰ちなえし一統ぬ

ようさゝる小虫ゝや

一こそのきれ　こゝやまて碁とう

け物の淺浣女の恋するゆへ也

一こゝねづり　わしらは令じ合物也

一このてんてんハちく寄宝の紙に造かへ繁雑に成べし

一ころのとく ひびの徳するさやうなるつとや

一うつさんざん 権記行成ハ長徳四年十月九日於山階寺ニ拝見牛頭栴檀木ヲ
を作て緑毛まで色有や

一うれこハうねを 金までひけて

一ひ家のぐ 一具とや

一心ざしハを むちうさハこなすうるす成べし

一心ちとやすさ 何どもそれぬ 筆どもちとある

一心こそうき世の あはれうさつま あはれるやも

一ひきうべ 紙聚際にあつらんとや

一ことくまハ 悪まハや

江

一口さゝわ(きりつわ)　えらうさぬ心也　一口いうまじく　らんがうさ心也

一ろんぎれば(ろうきやう)　怨(エン)うらむる心也　一口んは　艶(エン)也

一口やひこつかしされ　空蝉(ウツセミ)のつれなさゆゑゆへ後ものぞれん

此はいやおもしろさとの心也　一思こまげて(まつむ)　思ひを曲(マゲ)てさても

あすさ女房なるゝれなるをいへる

一口ひのか　けがうさいふは又焼亡(セウマウ)の跡落(シヤウメツ)也。後(ノチ)けがう一筋とぞ

河衣被香(エヒノカ)　一口ひそめ　蒲萄(エビ)は紫(ムラサキイロ)也。紫の

くろきゝ也　一思いるゝしあへるは舞(まひ)のそて

はある詠曲(エイキヨク)のしらべし。青海波(セイガイハ)の處(ところ)は詠(ゑい)の声(くわ)

一思いまさあへる(あつひ)　纓冠(エイクワン)のことや。着服(チヤクフク)の人へ冬(ニウ)冠(ノ)纓(エイノ)

一思ひのあしとの消(すまし)　白楽天が江州(カウシウ)へ左遷(サセン)して三月毎日よ

夷陵と云所に泊て元微之に別し時作る詩の句也　醉悲灑涙

春盃裏吟苦支頤暁燭前

一 延喜の帝くまゐり門つくへまゐり給あやまちまぶをめし給ふこ

そこぎんきれもつまうれれてまゐのて侍れとハ明石の巻ハ延喜

の帝門まゐつてかりて三代まで嫁めかど女のあかさへらのハ明石と

の箏の琴になるうすを入道のうち出てるやせんよハ延喜の帝門也

一 ひびそうして　蒲萄髪也いさる紀のこしとろうとあけあへき

されバえひさ又うくまるれかといつへまさ又後撰女説ろづくさいえん

あまるへさるや

一 忽ろう　廻向

一 朱雀のをうけ　近衛司中将云ゝ官人ホ也近衛殿下前求子なまま

かとせ

一 撰はうしぎう　礼儀也

一 にほこそ 纓(エイ)也
一 ゑからま 英(エイ)なる也
一 にほへる 艶(エン)也 ほむる詞也

て

一 てんかうのきんじ 輦(テグルマ)此を仰(オホセ)出さるゝ也 河(カ) 輦車(テクルマ)を石(イシ)
階(ハシ)のまへさき門より内の中宮(ナカノミヤ)を出入のまゝ也 中宮(ナカノミヤ)の輦車
ともいふ 牛車(ウシクルマ)は手車より東までの事也 今 紫 温明殿(ウンメイテン) 後涼(コウリヤウ)
殿はこれ中の人の門内の殿也 温明殿は内侍(ナイシ)所(トコロ)おはします殿也
東の宣陽門(センヤウモン)の中にある 後涼殿は西の陰明(インメイ)門の内なり
[illegible]
[illegible] 延喜式にも
人 [illegible] 親王(シンワウ)は後涼殿の後(ウシロ)を [illegible]

是又無為の陣と云ハ中此室此門の外也閤門とハ云ハ中此室を
門と云也云ゝ親範(チカノリ)說(セツニ)云女房ハ車よりハちかくてたれハあかき車也
もれば橘(ウ)をとゞめて六府(フ)の官人のやくとして出入する也云ゝ

一 てうと　調度(テウド)

一 亭子院　寛平(クハンペイ)法皇の御事
也延喜の父御門宇多(ウダ)の帝と申し也此絵(エ)をかゝせ給ひてかす
哥御作り給べし　紅葉(モミヂ)をいれたる(イド)をとらせ給ひ袖(ソデ)乃
洞(ホラ)ちかくなる○一番(ノ)亭子院(テイシノ)の御はからひ給ひて絵かへる也伊勢集に
のせられたる也

一 てうし　調子(テウシ)の義也

一 てまつる　手まつるとハ秋相にして也玉壺(タマツボ)を紫(ムラサキ)の根(ネ)に
哥かつむきに　してそれまつ紙(ヌ)あそへるを云也いろしくハいろかや

一 朔拝(ちかのり)　正月朔日の小朝拝(コデウハイ)を云朝賀(テウガ)のあらず時

清涼殿の前の庭に諸臣拝也

一天地ことろとよへてん地とさたむとよむべし

一天にむまるゝ人の生天先堕二三途一天に生るゝ者おほくして三途におつるものおほし又よき縁にひかれて一時に天に生るゝ者也畢天人の身と人をいふ

一天のまなこ　天眼也

一天べんざいてんは　天が志

さかまきたるおもむきとや　一蝶鳥なる八人　蝶のつげに舞出るときに花瓶もちたる童の剣舞人なる也

一てふいまして　童の舞たるすべし　妙べし

一てうらぬ心ち　畢よきさるをも双六ようつぬ心也

一貴上人いれいの内蔵のことすへし　貴上人は禁中に

目中八千終

目中分終

ゑぜんず院の教上人へ良覚の教上人あざむいて、京都にまゐれ
されて、昇殿すべきよしのおほせを中にうけたまはるところに
へし院よりて昇殿しけれども、内裏にていまだ昇殿をせず
も、教上の役にまかりなりけるもの也と云々

一　てうがく　調楽

一　てかきやうし　手掻人にいふ

れいじと云ことは不思議にして、くまていさましきと云也

一　天人のあまくだれる　かくや姫を竹取の翁がえたりしに家乃
中ひかりて八月十五夜に天上のかへりし也
夢のうき橋

一　てんぐ　天狗と云は星の名、天狗に用ゐる事は天魔の類にいへり